

科学図書館ブックレット

梅園拾葉

三浦梅園著



科学図書館

梅園拾葉

三浦梅園

目次

梅園拾葉題言	三
梅園拾葉卷之上	
一、答「上田養伯」	四
一、同	七
一、天狗説	八
一、津加美佐志の説	一
一、答「辻玄養」	二
一、手野村貞平行状並募「志記」	四
梅園拾葉卷之中	
一、子嗣の辨	八
一、桜島火変の説	四
一、重記火変	七
一、答「多賀墨卿」	八

一、再答「多賀墨卿」…………… 四

【参考】訓読文…………… 五

梅園拾葉卷之下

一、三答「多賀墨卿」…………… 七

一、戲示「学徒」…………… 六

一、長州赤間関二人のうかれ女…………… 六

一、豊前僧禪海…………… 七

梅園拾葉跋…………… 七

梅園拾葉題言

匪_レ花匪_レ実。翩_レ其墜矣。寧可_レ供_三之於_二人之觀_一哉。唯子睦愛_レ我之切。不_レ忍_レ於_レ捨乎。拾而収焉。諺曰愛_二其人_一。及_二屋烏_一。於是乎觀_レ之。其意可_レ謝。其实可_レ恥。及_レ還題_二數言_一以_二言_一命名之意。天明辛丑

天明改元秋九月

三浦 晉

梅園拾葉卷之上

豊後 三浦晉 安貞 著

加藤修 子睦 輯

答「上田養伯」

賢胤の昏議、御親戚を置、遠く存問に預り候事、ふして相考候に、今世態人情の事に候はゞ、うときこなた迄に及候はん由なく候。誠に易にいほゆる、同人于_レ野の意にや。君子の貞に利すと申候へば、敢てきける処をのべて、正しく対ずんば有べからず候。嫁娶は人倫の本、夫婦義あつて、父子親むとも、古典に出候。さる程に、妻をめとるは、人に父たるの道をしり、夫に嫁するは、人に母たるの道をしり候て、夫婦なるべく候。依て周公礼を立、男子をして三十にして娶らしめ、女子をして二十にして嫁せしむと定め給へり。されども礼は経にて經常の義をのべ候。人常世態は常ならぬものに候へば、喪あり、疾あり、百の事故ありて、たしかには定がたければ、三十二は、粗其頤を挙て、準を立候ものにて、究屈に心得べき事には有まじく候。さればこそ孔子も十九にして宋の開官氏に娶り、二十にして、伯魚を設給へり。又嫁娶の礼、上古は定りし事もなかりしならん。其後殷周のたがひ

有。聖人の礼をまふけ給へるは、親疎をば服の軽重にわかち給へり。服は大概斬衰齊衰に三年期あり。然して大功九月、小功五月、緦麻三月、それより遠きは服つくる也。是によりて、礼の喪服小記にも、上殺下殺旁殺して親畢ると有。上殺は、己が身より上父祖曾高、この四を過ては服なく候下殺は、己が身より下子孫曾玄、是より下又服なし。是より旁とは己と父母を同しうする者は兄弟なり。父と父母を同しふするの同行は、従父兄弟也。祖父と父母を同しふするの同行は、再従兄弟なり。曾祖父と父母と同しふするの同行は、三従兄弟也。上高祖父にて殺候へば、高祖と父母を同しうするの同行は、服なきの親よりわかれ候ゆへ、服なく候。されどもわかれて遠からぬ故、四従兄弟の死に袒免いたし候。高祖の父のわかれ五世は袒免す。その父より分れたるは、六世にして袒免もなし。よりて殷の制は六世になれば、ゆるして婚姻を通じき。周の礼は、姓をうごかぬものと定め、世隔れば姓より族を生じ、木に枝の生ずる如く、族はさまざまかはれども、姓は決して替らぬものと定めたり。猶こなたにて、新田足利邊見武田など数限なく分れても同じ清和の源なるが如し。さありて祖をまつるに、族人昭穆を以て皆集りまつる故に、百世経ても同姓は婚姻を通ぜずと定め給へり。されば我邦は君臣の分正しき事、万国に類なく、神の御代より今の世にいたる迄、高御座うごきなく、拱を九重の内につたれ、四海浪穩に治まる事、世に有がたき例に候。されば社外より称して君子国ともいひ、孔子もいやしき事あらじとて、桴を浮めてをらんと欲し給ひし由に候。されども男女の事は、大樸いまだ開けず候き。恐

多く候得共、世々のふみにも候へば、一二をあげ申候。彦火々出見尊わたつみ少童命の長女豊玉姫を娶り、彦波漱武鸕鷀菴葺不合尊をうみ給へり。葺不合尊は豊玉姫の妹玉依姫をめとり給ひて、神日本磐余彦尊をうみ給へり。即神武天皇也。是は外戚につきての小母也。さて人皇十二代景行天皇は、垂仁天皇の御子にして、日本武尊をうみ給ふ。此尊東夷征伐の帰路伊勢能褒野にしてかんさりましませしかば、一生日嗣をしろしめさず。其御子ぞ成務天皇の譲をうけ給ひて、帝位にのぼらせ給ひき。是即仲哀天皇也。抑此天皇の御母は両道入姫と申て、垂仁の御子景行天皇倭姫命の為にも、おなじく妹にてわたらせ給へば直に日本武尊の為めには、姑君にてましませし也。第三十代欽明天皇は、宣化天皇と同じく継体天皇の御はらからにてましくき。然るに宣化帝の皇女石媛をいれ給ひて、敏達天皇をうみ給へり。其後もかゝる例ども多く侍りし程にや、源氏物語などの根なし言にも、いろくの見ぐるしき事ども思ひつゞけて書つらねけるに社と、歎はしく候。さる程に男女の道、人そろくとしりて、恥らふ様にもなりしは、儒教ひろまり候故と覚候。誠にその後とても自然と人その甚しき非を存候迄にて制作の汰沙もなく候へば、むかしに因準して行なりの風俗に候。聖人の文には、兄弟の子は猶子のごとしとありて、同行父母は吾より小父おぢ小母おはの輩行にてあしらひ候程に、うちつけにはかゝる物語りもいむ程にこそ候を、こなたはむかしよりのならはしにて、王公大人よりして、此沙汰はなき事にて、御来書の通滔々たるもの皆是に候へば、起つて聖人の礼に従はんも、因準して国風に従はんも、非しる人もほ

むる人も有まじく候。され共晉が兼て存候は、親族はいつ迄も久しく替らずむつばずして叶はぬ物に候。夫婦は礼をもて合ひ、義をもて離るゝ物に候。義をもて離れ候ても、むつばぬむかし程は心よからぬ物に候。遠き慮(マユ)なければ必近き憂ありと、是等も聖人制作の日、遠慮のひとつにて候しかもしらず。よりて婚姻は疎族がよき物と兼て存候。賢胤弱冠、足下猶日月に富せられ候。時勢の可否をはかり、義理に斟酌御取はからひ候はゞ、いづれ賢慮に過候事有まじく候不悉。

同

一、檀弓礼不_レ下_二庶人_一といふ句、是は下の刑不_レ上_二大夫_一といふ句と相對したる句也。それを兩節にわかちたらは、陳澹の誤と見えたり。礼不_レ下_二庶人_一とは、礼に天子公卿大夫士の礼あり。故に士婚禮、士喪礼、士冠礼、士相見礼など有て、庶人の婚禮冠礼相見礼など云事なし。すべて庶人はやつくしく、物事そなはらぬものなれば、古の作者迄の礼を制したり、故に先儒の説にも、庶人事あれば士の礼を假て、これを行ふことあり。刑不_レ上_二大夫_一といふも、刑に大夫を刑すると云所を制せず。此故に庶人事あれば、士の礼をかつて行ふ。大夫罪あれば、悪人の刑を以て行ふ也、むかし刑を制する日、大夫を刑する制を立ず。礼を制する日、庶人の行ふ礼を制せざるなり。礼を庶人に行はず、刑を大夫に行はずといふ事にては、あらざるか。

一、礼と儀と別なりといへども、儀も亦通じて礼といふなり。

一、左伝、畜龍の事見えたり。管見を以てこれを見るに、蓋古帝王の時、雲の瑞あれば、雲にて官名を紀し、龍の瑞あれば、龍にて官名を紀したり。雲とつけ、龍とつけても、雲にも龍にもあづかる事ともみえず。それが時代遙におしうつり、纔に豢龍氏、御龍氏などいふ名のみ残りたるゆへ、終にあやしき事附会したると見えたり。古の龍畜れ候へば、今の龍もかはれ候。末也には、箇様の事ども、附会多く候て、書も見にくき事多く候。たとへば太神の無名雉を天雅彦に使い給ひし事を、無名雉を鳥といひなしたるの類なるべし。

天狗説

客来り、天狗をとふもの有。主人こたへていひけるは、我きける処数多し。大空をとぶ星をよばひ星といふ。そのうちに声あるとのふたつあり。声なきをば枉矢といひ、声有をば天狗といふ。舒明天皇の頃、星飛で声雷の如し。僧旻天狗なりと奏せし事あり。よばひ星は、呼び星にやあらん。又経のほしのうちに、井宿の分に一座七星、南にたれてかゝれるを天狗とよべり。又天狗は夜をつかさどる、天鷄は晨をつかさどるといふは、斗牛之間天鷄とならべる星にして、井宿の天狗にはあらざるべし。又獲といふけだものは、狸の類にして、土に穴をほりすむものなり。蜀の国にては天狗といふよし、本草にも見えたり。爾雅にはかはせびといふ鳥をも、天狗とするせり。又山海経には陰山に狸に似て首しろきけだ

もの有、天狗といふよしなり。獲とは別なるにや。又同じ書に、天犬といふも侍り。是は赤して犬の類と見えたり。その下る所に兵有よしなれば、常にあるものにはあらざるべし。又蝦夷より能登の方の海には、いかにも鼻ののびたる魚ありて、処の俗天狗魚といふよし聞侍る。かゝるたぐひにやといひたれば、客頭をふりて、いなさにはあらず、世に天狗となんいふものは、所々高き山のいただきに処をしめ、さだかには人目にもかゝらず、画にかけるかたちを見るに、そのさま人の如くにして、面いぶせく、目とく、鼻高く、爪甚長し、肩の後に翅生えたり、かしらに頭巾をいたゞき、身に袈裟をまとへり、されば虚空を飛行して、ちさとのくまもまたたきのひまにかけり、人間をうかゞひては、驕りあなどる心あるをばともなひもてゆくなれど、剛なる人をば得をかさず、己が心にさかふものをば、或はつかみ、絶巘喬木の上にかけて、或はもとの所にかえず、風を生じ、火を化し、身を変化して、人ともなり、鳥ともなり、踊るゝもかくるゝも自在なり、されど日に三度熱鉄の湯をのみ苦む事限なし、終に身死して蘇り又飛行自在なりといへり、造化の間かゝる怪異のものも侍るべきにやといひたれば、主人おしまづきをはなれ、我幾度もかうやうのもののみつといひたれば、客眉をひそめ、あなあやし、いかで幾度もかうやうのもの見るべきといふにぞ、いざとよいかでか欺き申さん、さらばかたり侍らん、それ己たかきに居て、人を見おろすは、高山にすむにあらずや、頭巾は、悪魔降伏の相をあらはし、袈裟まとへるさまは、しめやかにおとなしく見え侍るにあらずや、さあつて物をよくやぶるは、爪のながき

にあらざや、己才にほこり、人をば皆おろかなる様におもひあなどるなどは、鼻の高きにあらざや、人の恥らひかくす事をばさぐりあばくは、目のときにあらざや、仇をせんとては、敵ながらもみかたと見え、ひが事ながら理と心まどへるは、変化自在にあらざや、尋もとめて覚をむすぶは、そのともをかたらふにあらざや、かしこき人をさくるは、剛なる人をばをかさぐるにあらざや、吾にさからふものをばさかしらをかまへ、笞杖徒流死のかなしみをかけ侍るは、絶巘喬木にかくるにあらざや、さればかゝる身は、もろ人にうとみにくまれ、公につみせられ、いろ／＼とわざはひにあひ侍るは、熱鉄の湯をのむにあらざや、されどからうじて命たすかれば、こりあらたむる心はなくて、やがて又かれをうらみ、これを猜み、よしなきむかしに立歸るに、又よみがへり飛行自在にあらざや、されば唐の大和の昔の文より、今のうき世の有さまにならずらへて、つく／＼とかうがへ侍れば、唯このものゝ生かへり死かへり、家国こゝろのさまたげをなし侍る社、浅間しけれ、北條高時入道の酒宴の席に、天王寺のゆうれい星とうたひしは、わずかに其あとを人に見咎られたるなるべし、いでやかゝるおそろしきものをふせがんずる祈は、心すなほにして、まされるをうやまひ、おとれるをいとおしみ、かりにもおかしあなどる心なく、物毎に己が為につとめなば、いづくか鬼のすみかなるべき、穴賢なしとな思ひ給ひそと、いひければ、問ける人も心得て、誠やこの頃の人の心の時雨の空の、照るも曇るも定なきより、積れる雪のあしたの頼かたなきも、人の世の中にたとへ侍れば、此画の如くおもひなされ候とてま

かりぬ。時は明和改元後の師走十二日。かたれるまゝに梅園の南の窓にて書つけ待る。

津加美佐志の説

花は生るも投いるゝも、各その法ありとぞいふなる。されどかたるなかなる人はしらず。知らずとて花のめでたからぬかは。軒に半垢つきたる花桶のかたくなゝるを、心ぼそくもいとにかけて、花のおほかるおほからぬは、童山賤の手にまかせつゝ、捨やらす、取つゝろはず、つかみさせば、おのがまにゝ乱あひて、仰ぐべきはたれ、ひきかるべきは高く、おもふまゝならぬも、人の世になぞらへておかし。花の名残はさら也、枝あぢきなくかれ、葉哀におとろへぬるが、興ふかければ、いつもさゝがにの蛛のすみかとなるまで、かへやらで、旧きに新なるをかさぬれば、餘所目さぞいぶせからん。隣なる龜てふ童の、此ころ桜おし気なく折来て、元てふ子にさゝせたるが、風にさそはれ、文のはし硯の面に散かりて、人の心をなやませしも、いつかきのふのむかしにて、あとはわか葉のわづかなる水を命とも知らず、みどりをそへ、花しべ艶にのこれり。行春のかたみと思へば、いかで捨やはやるべき。蝶や蜂の来なれて、尋まよふも心ぐるしく、椿しやがよふのもの折そへぬれば、かれも所得顔に遊びたはむれつゝ、万物静に観れば、皆自得といふ事など思ひ出て口ずさみけり。かの枝をわかね葉をすかし、花ぶさをつみ、色うつろへば、やがて情なくかひやり捨るを口をしとは、われひとりしておもふ事にや。

答「辻玄養」

人の称に、姓と氏と行第と名との四つ有。氏は族ともいへり。今苗字といふ。行第は呼名なり。仮名ともいふ。名は名乗とも実名とも称する也。夫姓は天子より賜はるものにして、木に幹あるが如し。故に氏は姓より出、又その一族をわかつ程に、時として変化する事もあれども、姓は万世かはらぬものなり。故に姓につぎて重きものは氏に候得ば、故なく物好によりて他苗を冒す類、祖先に対し、不敬の至なるべし。いかんとなれば、氏は堅に貫くものにして、是によりて誰が先祖誰が子孫もわかるゝものなれば也、さて行第のある処、是を苗字にそへて呼名とする也。太郎次郎三郎是なり。餘五將軍維茂とは、將軍の号にあらず。もと十五男なる故に、餘五郎と称せしによりて也。もろこしにても是等の事あり。沈三佺期、杜五審言、などいへる此類なり。されど和漢隔別の事なり。もろこし行第の事は東涯先生輩行説に、詳にその事を辨じられたり。幼き時は外に名ありて元服の時実名をつくるなり。是は烏帽子子親の役也。近頃通字といふ事をいひならはして、世々かしの字を通じて用る事あり。慥成故実なし。祖先より子孫にいたりて、氏豎につらぬけば、外に通る字意義なし。其上父の名の字を冒す事、礼にあらず。兄弟は横に貫くものゆえに、其字を通す事もあり。今の通字といふもの、兄弟に用るは、然るべきかに候名乗の事返し候て帰納もしらべ候への由、此道小子も学びて、わかき時は人にもかへし遣し候ひしが、大

に義理なき事をさとり候て、後はいづかたも需を拒み候也。近古の俗にも、源義朝の名、梟に返り候て、父を害せしなど、音の清濁もしらぬ人のいひ出せし妄言に候。反切と申事も、昔はなき事にて、漢人は韻にくわしく、音にうとく、梵は音にくわしく韻にうとく候ひしかば、梵漢音韻を合し帰納を得て、声音をしらべし物に候。すべて世の中の吉凶といふ物をしらんとならば、天為人為を辨へ、当遇の天命に達すれば、箇様の事より生ずる物にあらざる事を理會いたす事に候。今の名乗を返すと申事は、先易の吉卦を安んじ、音の五行を見て、生克の順逆を定め、字画をかぞへ、帰納の字を撰む事を面と致候。聖人の道の上に、易の六十四卦に、吉卦凶卦と申事なく候。五行生克は、周の末より起り候て、物に配当して造化を論じ候。是又聖人の学になく、天地自然に適はぬ事に候。其上医家にて申候得ば唇は土、喉は金、齒は水と配し候を、音家にては、喉は土、唇は水、牙は木、齒は金と配し候類、五行配当の内にも自相戻り候事に候。字は世々に変じ候て、むかし夏禹の頃の文字は、岫嶽山の碑とて、今に残りて、少しも今の文字に似よる事もなく候。周の頃は初は大篆とて御座候。宣王石鼓の文とて、今にありて読ぬ物に候。孔子の頃は、蝌斗逆かへる子の形の様なる字行れし也。今の隸字といふものは、やうく秦の始皇の頃、事繁く字むづかしかければ、下つかた役人ども手はしりよき為に設けたる物に候。かゝる事に候へば、今の隸字に限り、其画造化の機密に合し候はん様なく候。音に五行を配し候は、もろこしの音に候。今これを呼候は和音に候。和漢の音、唇舌牙齒喉おなじからざるもの有。

疑和はギと呼び、漢はイ、とよび、曉和はキヤウとよび、漢はヒヤウと呼の類に候。さ候へば支那国の韵鏡は用立まじく候。さり連こなたの韵鏡もこれなく候。又文字の音韵をしらべ候には、音を用ひ、名を呼候には和訓を用候はば、いづれの音に従ひ候はんや。畢竟技者精をてらひ、口を鯛ふの術と覚候。この故に、名はくらからぬ人により、出処正しき文字をゑらび、もちひ給はん事、尤可_レ然奉_レ存候也。九月盡。

手野村貞平行状並募_レ志記

我豊国東の郡武蔵の郷手野村に貞平といへる者あり。ことし四十六。父は又助とて貧しく暮しけるが、ふたりの子をもてり。田がへし草きる営もつきて、姉なるよしといへるは十九、貞平十歳になりたるを引具し、妻とともに、寛保の頃、世わたるよすが求めて、筑前国志摩の郡本岡村といへるに足を止め、十七年経ぬ。其内又助も身まかり、たのむ木蔭もなき心地して、又故郷にかへりけり。里人あはれがりて、やうく、畳五畳ばかり敷ける小家つくりておくり、むかし親の作りすてし地の少し有けるをかへし渡しぬ。己もとより唾なれば、物かたり物きく事もかなはず、母は年老ぬそれさへあるに姉なるものゝやめるが上に、目もさやかならず、朝食夕食の煙だに有かなきかに、世を過しぬ。されども此者天性_至孝にして、ころの及ぶ限りは、母姉に志を盡しける。其貧しき事いはん限なし。されども其潔き心からに、菜をつみて飯にかえ、水をわかつて湯となし、春はいびら様の物

綿東東児、豊後の民、荒年にはくらふ、方言いびらという あ

さり、飢渴をしのび、或は日傭などとりて、人にこひ求むる事をなさず。たまたまやむ事を得ず物かる事のあれば、指を出して日をかぞへかへすべき期を違へず。さりし安永五年申の霜月、その母死しけり。貞平かなしびにたへず。三日の間、物くらふ事能はず。親族いろいろとすかしすゝめて、漸く食事をすゝめけり。さてかゝる様なれば、母葬らん事もいかゞあらんと、かたへよりも思ひ煩ひけるに、終焉の設は、とくより覚悟して、被^かぐべき衣米味噌様の物まで、隣なる村へ在ける小父にあづけ置、いかに乏しき事有りても、其代りをそなへざれば、これを用ひず。去程に其期に臨みては、終を送る心遣ひなし。母なくなりて、姉を母の如くいとおしみつかへけり。あまり貧しければ、姉袖乞せんなど思ひ立けれど、貞平其気色見て、殊の外なげき、手をひろげてさへぎりとゞめ、涙をながし、袖をひかへ、己働き養はんずる真似をして出さず。ひそかに聞けば、姉のなからんの後のそなへも、母のそなへの如くいとなみつる由なり。去年酉の夏、孝状国の守にもきこえ、褒美なさしめ給ひける。貞平痛く悦べる気色して拝納し、是にて母の石碑建なん事をはかる。口ものいはざれば、情もるゝに由なしといへども、心にいかばかりか、君の賜を榮とも思ひぬらん。推はかられて哀なり。むかし子路の賢を以ても、親につかふる事の思ふ儘ならざる事を、孔子に対して、いたましきかな貧しき事、生けるには以て養をなす事なく死せるには以て礼をなしがたしとて歎けり、かくばかり貧しきが中にも、廉恥の志たゆまず、親に孝に姉に友なる事、松の緑の霜雪に色かへぬ心地して、我同盟の人に告げ、其洵輒の難を

救はん事をこひ願ふ。其おもむき左の如し。人と禽獸との相さる事、いくばくもなし。只慈愛廉恥の心をうしなふと、失なはざるとの間なり。慈愛廉恥、即仁義の心也。この心を存する時は、子としては孝に、臣としては忠に、父としては慈に、君としては恵に、衆にあつくは争はず。若此心を失ふ時は、子としては不孝に、臣としては不忠に、父としては不慈に、君としては、下を恵むの志なく、衆にあつてはもとよりそむく。それ生を惜しみ、死を恐れ、親子の恩愛、夫婦の情慾、生としいけるものこれなきはなし。されどこれを人にたくらぶるに、只愛を推し、恥をするの心こそ、彼になくして、我に有するものならぬ。其禽獸になくして、人のみ独有するものもちながら、其心にすさみなば、己自禽獸の域におちいるともいふべし。されば古人の言にも、園林雖好主人之心則荒むといへり。いかに衣服うつくしく着なし、居室結構をつくせりとも、心の底の塵はらはざらんには、いかにばかり心おとりせらるらん。此者かく困苦の内にあるといへども、人に乞ひ求むるの心なし。其操のたてばなり。されば世の人を觀るに、爵位のすまん事を願ひ、福沢しげからん事を求むる故に、肩をそびやかして、人にこびへつらひ、又は己を利せんとて、人を苦しめ、道ならず財宝を積て、外はいかめしく晴がましき様なるも、いかでこの男の心の隈なく照る月の秋の夜のいさぎよきが如くなるには及ぶべき。されば孝は百行の本といへり。此者もとより不真の身なれば、賢き聖の教きけるにもあらず、礼に親の喪を執るに、水漿口にいらざる事三日とあり。己孝心の厚ければ、自然と其本文にもかなふなるべし。此男の

髮鬚髻として、藍縷うちき、いとあはれなるさまなるも、内には聖賢にも恥ざる心抱けり。人もし此心のつとらば、官に臨みては貧らず、孝悌忠信の基も立、礼義廉恥の心も生じ、文のはしくれにてもものぞき見るもの、一文不通の人に及ばざるは、憤激勉励の始ともなりぬべし。しからば少しく己が慈愛の心をひらき、力を合せて其孝思をもたすけよと、同盟の人にすゝめ、同盟ならずとも、これをあはれとも、とめん人は、同じ志をはこべかしと、其行状をしるして、此人の志をも助よかしと、つげ侍る事しかり。安永戊戌五月日。

其後その志を感じ、遠近の贈り物多く集れり。殊に久留島候の上大夫吉澄氏へいかゞし
てつたへけん、此記いたりて、方金二個賜りぬ。野人の栄、何かこれに勝るべき。

梅園拾葉卷之中

豊後 三浦晋 安貞 著

加藝修^(イ) 子睦 輯

子嗣の辨

人家不幸にして子なき時、弟あれば其弟を子とし、孫あれば其孫を子とし、女子あれば婿をとりて其家を継しめ、猶なき時は異姓にもとめ、其家の絶ざれば、其家の老や幼き輩も是に手より、老はやすく終をとり、幼は孤とならずしてひと、なれるなり。もろこしの法は其血脈をおもんずる事にて、同族までに養ふべきものなければ、其家は断絶する事なり。女子は有ても家督とせざる風なり。されども他族より養ふ事も絶てなきといふにはあらず。ざるを贅婿といへり。贅はこぶといふ字にて、こぶは身の外に身の様なる肉を結べるものゆゑに、これより転じていへると見えたり。戦国の時の淳于髡もその人なり。漢書賈誼伝かに、家貧しく子衆ければ、出て贅すといふ語ありし様に覚ゆ。又あの方の宦官といふものは、陰をたちて君につかふるもの故に子なし。是等又人の子を養ひて家を譲る。魏の曹操などいへるも、かゝるもの、末なり。右のごとく、もろこしにては、女子ありてだに、其家はつづかずとする風ゆゑに、贅婿は人賤しむ事と見えたり。我国の風は、是には異なる

事あり。帝統の如きは格別の事にして、其人ならずして継べき様なし。末の人に至りては、已事を得ざる日は、他族をも養ふなり。法は人の立たるものにして、風は其国のならはしなり。男女は人の陰陽にして、男は家に居て、他族の女子をむかへて配偶し、女子は父の家を出て、他族に嫁し、其家を家とする事、天地の條理なればとかくいふべき事なし。されども不幸にして、男子なきにあひては、女子とても父母の血脈に相違なければ、女子は家が続べからずといふも、人の立たる法なり。女子も其家が続べしと立たるも、人の法なり。男子あらんには男子家を有すべし。梅の條も接けば挑の木にもつぎ、橘の條も接けば柚の木にもつぐよりして見れば、天地に此理なきにしもあらず。さあれば男子なからん日、女子はありても断絶と同じと立たるも、畢竟隘なる説なり。今の学者からの書に見なれ、からの教にあはざる事をば疑ひあやしむも、学習の蔽なるべし。徂徠諸侯の国の事を論じて、子なき時は天これを絶なれば、国除すべしといへり。熊澤子は人は盡天地の子なり、他族もつぐべしといへり。名分にをゐては、徂徠の説正しき様なれども、今一国の衆、その君により、老を養ひ、孤をめぐみ、妻子従類を扶助するもの幾ぞやそれを名分に拘り、人の父母妻子を凍餓して、溝壑に転ぜしむ、天地生生の徳に負く、達者の見にあらず。もろこしの事はいざ知らず。我国のならはしより、今の人情に考へ、天地生物の徳におし本づけてこれを見るに、なるべき程は、同族親戚に求め、もとめて得ずんば他に求むるも苦しからじ。熊澤子人は悉天地の子なりと観たるも、已事を得ざるの上の達見なり。本邦にて、養

子の始をいはゞ、太神宮素盞鳴男尊の御子天忍穗耳尊を養ひ、天津日嗣となさしめ給ひしぞ、其始なるべからん。女子にして統をたれ給ひしは、是又太神宮を始とし奉り、推古、欽明の御子として崇峻帝の讓をうけ給ひ、元正天武の御孫として、文武の統を嗣給ひし類、その例多し、下つかたにもむかしさぞ是等に類せる事も多かりしならん。鎌倉の頃、北條政事を沙汰せしには、専女子父の家をつぐ例も多かりし事なり。さて我百歳の後、託すべき子なければ、我子ならぬ人を養ひて子とする事なり、其子とするにつきてはさまざまの難義あり。難義といへるは、譬ば伯兄なる人に子なく、其仲弟を養ひて子とせんに、猶叔季の弟あり、己兄の子となれば、叔季の弟、其日より席を改め、巖然として、叔父季父の位に居其兄退ひて姪の礼をとるべきや。又孫二人あらんに、弟たるもの故ありて重を承けて、祖父の後たらんに、其兄をして従子の列につかしむべきや。又己女子あり、他より一人を養ひ得て、偶配せんに、子といへば、同胞相配するに似たり、婿といへば、他族の称なり。婿養子といへるは、子なきにより、引とりて子として家を譲れるとしたるなるべし。されども婿といへば子にあらず。子といへば婿とへだてあり。名称いづれにも穩ならず。此頃或人の問けるは、こゝに人あらんに、其家あるじなくなり、おさなきむすめのみひとりあらんに、配偶すべきとて、わきよりひとりむかへ置てんもの、いく程なく身まかり、あとつぐべき人なくてやみがたしとて、又他の子求めて、其家の後と定めんに、さきの死せるものゝ跡なれば子なり。子なれば其幼き女子は母の列なり、共おさなきを他に嫁せんに

は血脈をたつなり、其死せるを父とせざらんには、其鬼をして祭をうくる処なからしめんか、らんかたにゆきなんずる人は、いかゞなづけ、いかゞ処して、義理に害なからんかとなり。晋こたへける様は、是等は誠に世の難義とする処なり。我を以てこれを見れば、これ難義にあらず。世に名称の明ならざるより起れるなり。其所謂名称とは、人の倫理、子といふあり、嗣といふあり。子嗣の辨明ならず。此難義となれる也。それ子は父の後を続ぐものなれば、父の嗣なり。嗣は子なきによりてあるものなれば、子と差別あり。さて子は嗣なりといふ内にも、世の中の事、常あり、変ある習なれば、嫡長必其家をつぐ□もあらず。嫡長にして其家をつげば、嫡長即其家の嗣なり。叔季にして其家をつげば、叔季即其嗣なり。嫡長継べからずして、庶子つぐ事あれば、庶子即父の嗣なり。然れば子即嗣なりといへども、嗣誰と定れる事なければ、子の父に嗣ぐも亦差別あり。右いへる如く、子なくて嗣を求むれば、其嗣は子なきに起る事なれば、子と称を同じふせざる事分明なり。故に嗣伯仲叔季庶に求め、兄弟にもとめ、従兄弟従子にもとめ、孫に求め、親族に得ざれば、他族にも求むる也。彼方にては弟つぐをば及ぶといふ。及ぶといへば、やはり弟兄の家督をつぐ事にして、其父母をば同じ父母とすると見えたり。是を兄死弟及ぶといへり。殷の世には、大抵兄より位をば次第して弟に及ぼせしなり。さる程に、微子は殷の紂王の兄なり。周に帰して宋国を賜りし後、その国を弟微仲に譲りしも、殷人には珍しき事にもあらず。天下も夏の禹王より後は、子に譲り嗣しむるといふ法たちたれども、五帝の頃は、天

下は天下の天下にして、一人の天下にあらずとして、同族の内にて賢徳ある人を撰み抜き、是に位を譲れり。此故に舜は堯の嗣にして、堯の子にあらず。禹は舜の嗣にして、舜の子にあらず。嗣の字は、虞書に、舜讓_レ于_レ徳弗_レ嗣として、下に正月上日受_三終于_三文祖_一とうけたれば、其終をうくるはつげるなり。是嗣の出処也。謹んで本邦帝統の序をいふに、神武天皇は鷓鴣草葺不合尊の御四男にましませしかども、葺不合尊の御跡をば、此帝つぎ給ひ、御子綏靖天皇も、御兄神八井耳手研耳の二尊を置き神武の嗣となり給へり。白髮帝は雄略の御子にて、雄略帝は允恭帝の御子也。白髮帝崩じ給ひ、御嗣なかりければ、履仲帝の御孫弘斗億斗の二君を求め得たり。履仲帝は允恭帝の御兄にして、共に仁徳帝の御子なれば、此二君は白髮帝の再従兄弟にてましませしが、二君共に位を譲りあひ給ひ、弟億斗の君譲りまかせ給ひ、帝位につき給ふ。是顯宗天皇也。然りしかば、兄弘斗の君儲の宮にましく、顯宗ほどなくかくれ給ひ、その跡を嗣給へり。皇極帝位を孝徳帝に譲り給ひ、孝徳帝崩御の後、再度位をふませ給ひしが、重祚前の位と同じふしがたきゆゑにや、御一人の御身なれども、諡号も前には皇極と号し奉り、後には斉明と申し奉り、世次も三十六代皇極天皇、三十七代孝徳天皇三十八代斉明天皇と数へ奉れば、始は孝徳皇極帝に嗣給ひ、後には斉明孝徳帝に嗣給ひし事分明なり。已に後の日嗣となり給ひ、さきの帝かくれ給はん日は、四海父母をうしなひ奉る事、祖宗に対し、天下に対し、御一人のわたくし事にあらざれば、諒闇の儀式、例の如くにぞとり行ひ給ひけん。しかれば嗣に父子の親み有て、兄

も弟に継ぐ、子も母に譲るべき理にて、嗣子分明に別也此故に北畠親房の神皇正統記にも、世と代とを分ちてしるしたる例もあり。これに准して見る時は末く、にいたりても其家督たらん人は、子にあらざればあたはずと定めしは、いにしへの道にはあらじとおもはる。まして其家にあらん女子は、猶いとけなき打たれ髪ならんものならば、此子年長じたらん上、媒たちて後配偶すべきなれば、其子の不信不貞なし。礼典に、婚をいゝの事ありても、故あればかへすといふ事あり。一旦婚姻の約ありては、婚禮なくとも其節を守るべしといへる本文は見あたり侍らず。さて畏こくも、天すべらぎの御事を、賤しき末く、の事に引奉るは、はゞかり多かる事なれども、賢き文の中にも、君子動而世為天子道、行而世為天下法、言而世為天下則、とありて、君子の徳を風とし、小人の徳を草とする事なれば、上の跡をたれ給ふ処、四海の効ひ法る事、もとより下の道なり。僭上とはいふべからずと、こたへける。又其人の問けるは、子と嗣とその隔てあり。父と嗣を養ふ人といかん。曰古人我子を同姓に遣はしては、かれに養父といひ、これに本生父といへり。嗣たらん人の為に、兄にもせよ、小父にもせよ、祖父或は他人にもせよ、父の位にある人なり。此故に嗣と子と別ありといへども、畢竟これは子の中にその別を論ずる事にて、嗣即子の位なれば、其義其したし即父子なり。古人養父嗣父の名あり、相通ずべしといへども、嗣父の称尤正し。父といへば、義といひしたしといひ、実の父子にことなるべからず。已に嗣の父といへば、兄を兄とし、小父を小父とし、祖父を祖父とし、他族を他族とするに妨

なし。天地は有のまゝなる物なり。有のまゝにすればむづかしからず。しかるを人の知恵にて有のまゝに細工をまじゆるに、いとむづかしく相なるなり。此一事に限れる事にもあらず。しからば養子といへる名はあたるべからざるか。いな、子なきによりて、養ひて子とすれば、養子即嗣なり。実の子なれば、養の字なし。唯子といふ字になづみて、我家督を譲るものは是即子なりといへるやまひあり。唯嗣といへらんが勝れりとかたりし。其あらましを遺忘にもそなへよと、書つゞけ、ひそかに自子嗣の辨と名づけ、其人に送り侍る事しかり。安永戊戌七月。

桜島火変の説

ことし安永己亥九月廿九日の夜より翌十月朔日、南にあたつて雷の如くにして雷にあらず、天鳴ともいふべくして然にあらず、石火矢などつるべ放つ様に聞ゆ。肥州阿蘇山焼るかなどいへり。程へてきくに、薩摩甕島より南にあたり、桜島とてめぐり十里もある様なる島あり。昼夜八九十度も地震り南北の端より火起り、大石を飛すこと六七里の外に及び、風起り黒煙東南に吹覆ひ、人死傷其数いまだしれずといへり。門生其故を問にこたへける様、去年以来伊豆の大島などもやくるよし沙汰せり。是は桜島よりは火勢ゆるく久しき様にきけり。是誠に稀代の変なり。されども天地より見れば常理なり。一体地といふ物は、水燥のふたつの氣にて、網縊造化の用をなすものなり。地の中は菌瓣蜂窠の如しと、古人も

いひて、菌のうちの理の如く、蜂の窠のあなの如く、蠹ばみたる木の如く、始終あちこちと穴あるものなり。燥とは地の気なり。故に体はなし。水の対偶のものなり。我輩かくのごとくねつおきつ、嘯諭を通ずる処も、其氣のうちなり。地中すべて此氣と水とふたつあり。水は高きに結び、卑き処に化する故、地上にうかみ、燥は地下に生じ、天中に化するもの故よく地中に伏す。水は川谷を道路として、処によりては伏流するもあり。燥は地中の穴を往来して鬱してあつまれば火となる。其氣穴山岳の間に通ずれば風となるものを風穴とし、火出るものを火穴とし、又時あつて雲霧を起す処ともなる事、皆燥氣の変なり、燥氣の火となるは、水の氷となると同じ理にて、冬の雨露をむすびて霜雪となる子、夏の温熱を鬱して雷電となるも一つ事なり。肥後の阿蘇、信濃の浅間などいふの、其氣の外にぬくるなり。其処は地賦とて、硫黄地溲溲様の地あぶらの結ぶ処にあり。さる処は冷水の中にも火もゆるなり。其外乎俗に地獄といふも、ひとつものにして、温湯といふは、其氣脈の上を水の通る所にて、水の暖まりたる也。さる故に其処を流れ過れば、本性に復してひゆるなり。海の底にも其氣通ずる処いくつとはなくあり。此うちに右の陽氣伏し月に厭れば、其氣わきへ行ゆゑ潮かれ、月側なれば陽氣下よりおこり水に入て水浜る也。水本性は下るものなり。陽氣そのうちに入れば、釜の内の水のわく如くのぼりゆくなり。されどその陽氣は客氣ゆゑに、外にぬけ出ればもとの水となり、又流れて下るなり。右の燥氣地中の空穴に貯へ硫黄等の物を醸し、一時に鬱発を致すなり。宝永の頃富士山のやけしも同じ

事なり。其内此度の如きは尤大變とみえたり。地震は其鬱氣発する勢なり。右の陽氣地に鬱し、地面を陰に閉られ、無理に其処へ発すれば地震なり。天間の陰氣に閉らるれば雷電なり。秋の初いなずまとてひかるも、夏の地面の陽氣のこれるを、秋陰の氣に肅せらるゝ故に発して散ずるなり。雷の微にして声なきなり。天鳴とて天のなるも雷の如くして声ある也。此節桜島の火も雷と同一理としるべし。伝へ聞に、甕島は北極の出地三十一度位のよし也。此地は三十五度餘りなり。此処によくその音の聞へたれば、中国あたりにも定めて聞けん。雷百里をうごかすとは、唐のみちのりにして、日本の十里にもとゞかぬことなり。誠に雷の音ほどたかきものはなき様なれども、十里にみたず。此節の鳴動は百里にも及ぬれば、物の音にかゝる大なるものはあるまじく覚ゆる也。水の流れ、火の起り、土地の出没するも、世界にたへぬことにして、もろこしの礪石といふは、世に類なき大石にして、むかしは陸なりしが、今は海の中に島の様に見ゆると聞り。からの西南のはての海に、万里といひて、東西は二三百里、南北は七八百里も砂石のみ茫茫としてあり。そのあたりはことの外嶮多く、阿蘭陀船など深くつゝしむ所なり。是むかしは国にてありしが、海に沈みしといゝつたへたり。歴史などにも地陥るといふ事多し。空穴ひしぐる故と見えたり。是は遠き事なれば、定かにもさしがたし。出雲の国秋鹿の郡の北なる海黒島といふ有しが、天慶三年十二月上旬、俄に落いりて、今は其跡とて大石など残れる事、著聞集にも見えたり。又天武天皇の十三年地震あり。伊豫の温泉つき埋め、土佐の田苑五十餘万頃没して海

となり、天おびたゞしく鳴り、伊豆の島の西北三百餘丈の高山出来たる事、日本紀にも見えたり、さつまあたり到此度の様の変にて山出来たる事、同じ紀かにある標にも覚へたれども暗記せず。ちかく慶長元年の七月、大地震速見高碕山なども石崩れ落ち、火出たるよし、府内の記事に見えたり。この時かのあたり人七百餘も損じたりとあり。寛永の頃、八丈が島のあたり一島を湧出し、年号をとりて寛永島ともいひ、宝永の頃、富士に火起りて一丘を生じ、宝永山ともいふ。水火は時としてかはる物なれば、むかしは富士の烟とよみしも、今はたゞずなり、下野むろのやしまの煙なども、今はたへぬ。越後蒲原郡如法寺といへるには、正保二年三月よりあつくなき火燃出て、百有餘年をへて今にたえず。是等の事を思ひ合せ、水火の用の工夫あるべきなり。霜月望。

重記火変

其後薩藩の知学事山本正誼まさよしの桜島炎上の記を得てよむに、安永八年己亥九月廿九日夜より十月朔日にいたり、薩城及東南北数十里の間、地震ふ事しきりなり。其日未の刻を過て、城下東方対岸桜島の上火起る。火もゆれば地震ひ、地ふるへば火もえ、声雷よりもとゞろき、光電よりもかゞやく。火騰る事数丈、石を激しく空中に相撃つ。五日を経て其勢漸く衰ふ。されども或は三四時をわたり、あるひは一二日を隔て、伏発常ならず。また東北五六里の海底より炎上る。其響隠々として、日夜やまず。既にして海上一洲を出す。水を出

ること二丈餘、周り半里なるべし。一月を経て、変動の勢やうやくふるきに復す。こゝにおひて桜島の形勢、高低参差旧觀にあらず。石つむもの、五六丈に及ぶ有。灰埋めて二三十尋にいたるあり。地の下風にあるものは沙石ひるが如し。藩は上風にあるを以て甚しきにいたらず。飛鳥走獸は砂石にあたり、魚鱉は海底の炎に傷らる。人この災にかゝるもの百四十有四人。島に村すべて十八あり。火の起る事古里村有根村瀬戸村黒神村高免村の上にあたる。是を以てこれらの村民死するもの多し。麋鹿或は海をしのぎて吉野といふにいたるものありといへり。さきに失記する者、続日本紀曰、廢帝天平宝字八年十二月、西方有_レ声、似_レ雷非_レ雷、時当_三大隅薩摩兩國之堺_一、烟雲晦冥、奔雷去来、七日之後乃天晴、於_三麋島信爾村之海_一沙石自聚化成_三三島_一、炎氣露見、有_レ如_三冶鑄之為_一形勢、相連望似_三四阿之屋_一、為_レ島被_レ埋者、民屋六十二区、口八十餘人、とあり。薩州にても其地今は定かならざるにや。正誼もこの島なるべしといへり。その後文明八年に焼たるよし、福昌寺の旧記に見えたりとあり。その遺跡炎崎とてあるとなん我右火變の図を得て後に出す。正誼の記に公命して昼のみる所、夜のみる所の二図を画しむとあり予が得るところは、いかなる人の図せるものによしらず。また伝へき、けるやうは、火變の前猪鹿狸狐やうのもの、盡く山林を出て村落に群り、田圃をあらしたりと。火氣下にうごきて、起居安からざりしゆゑなるべし。

一混沌鬱淳の義御尋御座候夫人は天地を宅とし居るものに候へば天地は学者の最先講ずべき事に御座候尤天文地理天行の推歩は西学入して段段精密にいたり候へ共それはそれ切にして天地の條理にいたりては今に徹底と存する人も不承候かく広き世の中にかく悠久の年月をかさねかく数限なき人の思慮を費して日夜に示して隠すことなき天地を何故に看得る人のなきとなれば生れて智なき始より只見なれ聞馴れ觸なれ何となしに癖つきて是が己が泥みとなり物を怪しみいぶかる心萌さず候泥みとは所執の念にして仏氏にいはゆる習氣にて候習氣とれ不申候事は何分心のはたらき出来らず候阿難はさとられしかども前生猴にて有しゆへ猴の習氣やまざりしと申候はよきたとへに候とかく人は人の心を以て物を思惟分別する故に人を執することやみがたく古今明哲の輩もこの習氣になやまされ人を以て天地万物をぬりまはし達觀の眼は開きがたく候其習氣とは人はゆく事をば足にてなし拵る事をば手にてなすゆゑ運歩作用に手足の習氣これありさる程に蛇の足なく魚の手なきどふやら不自由に思はれ候天は足なくして日夜にめぐり造化は手なくして花をさかせ子を給はせ魚をもつくり鳥をもつくり出し候もし己に執する処有候へば其運轉造化甚あやしむべき事に候あやしむべき事にしてあやしむ人もなく候は是も朝暮に見なれ空空として貪着なしに打過るにて候物の上よりして見る時は天地も一物にして水火も各一物草木鳥獸も各一物我となり人となるも各一物にて候それを人には人癖つき候て我にあるものを推して他を觀候なづみやみがたく候夫故人の癖には何にても人になして見もし思ひもし候子ども遊びの絵本

に鼠の嫁入ばけ物づくしなどいふあるをみるに其鼠を鼠のまゝにをき候へば鼠本来の面目に候を其鼠を悉く人になし賀殿は社杯大小嫁子は打かけ綿帽子のり物つらせ徒士若党すべて人の様に成し候又ばけ物の本を見るに傘の茶臼にばけ箒の手桶に変じたる図はなし只あるとあらゆる物目鼻手足出来りとかく人の様なる物に化ざるはなし涅槃像の図を見るに其龍王といふ物は衣冠正しき人体にてその本体の龍形は火事頭巾かづける様に画がきなしぬかかる心を以て天地を思惟する程に天には上帝地には堅牢風の神鳴神など形はさもいやらしく描きぬれども足を以て身を運び手を以て技を出す故に風は囊に蓄はえ雷は大鼓に声をくもし誠に囊あらば何を以て製するやもし誠に大鼓あらば何の皮にてはる事にやいとあやしもしかからましかば天も足なくてはゆかれまじ造化も手なくては細工出来まじ猶ちかきに引つけていはばすべて動物は牝牡有りて草木には牝牡なし牝牡なくて生生せざるは動物の習にして牝牡なくても生生に事缺ざるは草木の習なり己が習ひをもちて己にあらざる物に推さばいかで其理に通ずべき又譬をとりていはんに火に意ありて水を思はんにかれに水いかがして物を焼らん水いかがして物を燥かす覽と己がかたにある物のみ推してかれになりき所にもとめ水も亦意ありて水にある物を火に求めば其智力を盡し其生涯を窮めたりとも知るに益はなかるべし約をいる事牖よりすといふ事も候へば最さとしやすき物がたり又ひとつ申すべしむかし何れの帝にてかおはしましけん堺によき藤あるよしきこし召れ勅して九重の内に移し裁しめ給ひしに帝ある夜の御夢にいとよらかなる女の打しほれける氣

色して

思ひきや堺の浦の藤浪の

都のまつにかかるべしとは

と打ずんずると御覧じて夢さめ給ひ花も故郷や思ふとて二度堺に返し給ひしとぞ、これ等の物がたりは世に多き事なり草木意なし夢入るべき物にあらず別れては馴れし故郷をしたひ過てはこしかたをおもふは人の心にして我心の動く処めで給ふ花に感じ常になれてもて遊び給ふ歌をなしける物にして藤のあづかる処にあらずあづかる所なき花にも我情態をこれに移せば花もまた人なり古来明哲の輩も品は異なる事はあれども此病に座せられ人の境に居て人を離るること能はず目の翳障をなすなりさる故になれ癖に貧着なく是がなづみとなりて物をあやしみいぶかる心なき故に一生を醒るがごとく酔ふがごとくにして終るなりさらば物を怪しといぶかる心なくばなきにしてやむかとおもへばさにもあらず神鳴り地震るゝたりといへば人ごとに頸を撚りいかなる訳にやといひのしる我よりして是を觀ればその雷地震をあやしむこそあやしけれ故いかんとなれば其人地動くを怪しみて地の動かざる故を求め雷鳴る所を疑ひて鳴らざる所をたづねず是空空の見ならずや此故に皆人のしれたる事とおもふは生れて智の萌さざる始より見なれ聞なれ觸れなれたる癖つきて其知れたると思ふは慣れ癖のつきたる事なり我人に石を手にもちて手を放せば地に落るはいかな

る故ぞとへばそれは重きによりて下に落る也知れたる事也といふ是も其人知りて知れたる事といふにはあらずなれくせにて貪着なしにしたりとおもふなり然れば是醒たるがごとく酔たるが如しといはんも我過言にはあらざるべし此故に其うたがひあやしむべきは変にあらずして常の事也孔子の生を知らずいづくんぞ死をしらんとおしへ給ふもこの事なり人の死後はいかがなるらんいがある覽と怪しめども見在かくしてをる事も悉皆しれざる事なり俗語にも前の瀬わたりて後の瀬とこそいへしかるに世の人前の瀬を置き後の瀬の事のみおもふ我怪しむ所なりしかれば石物いふといふとも夫より己が物いふを怪しむべし枯木に花咲たりといふとも先生木に花さく故をたづぬべしかく物に不審の念をさしはさまば月日のゆきかへり造化の推遷るは更にして己が有と占め置ける目のみえ耳のきこゆるも態をなす手足も物をおもふ心もひとつとして合点ゆきたる事はあるまじく候そを世のいかががすますとなれば筈といふものをこしらえてこれにかけてしまふ也其筈とは目は見ゆる筈耳は聞ゆる筈重き物は沈む筈かるき物は浮ぶ筈是はしれたる事なりとすますなり然れば其次手に雷は鳴る筈にて鳴り地震は動く筈にて動き枯木に花さかんとさけばさく筈石の物いはんもいへばいふ筈とすまし度物なり又少し書読るなどいふ人は雷は陰陽の闘などいひて人をさとすなり其人に陰陽といふものをとへばしらず爰において我その智と愚とを辨ずる事能はずこの故に智を天地に達せんとならば雷をあやしみ地震をいぶかる心を手がかりとして此天地をくるめて一大疑団となしたき物に候猛獸まさに搏んとすれば必形を伏す鷲鳥

まさに撃んとすれば必翼を斂むとも申けるとき事をせんとてはふかくとどまる事をなす事に候弓をひくにも矢の弓手に遠くゆくは馬手にふかく引ゆへなり疑ひ多き人さとする事とし疑なき人のさとする事鈍きは弓に満を持せずして矢を放てるがごとし此故に世の人の天地をしらざるは慣れ癖に貪着なく習氣を秘蔵する故にて候是に因て天地を達観せんと思召して平生慣れて常とする事を疑の初門とし觸るる事悉御不審を起され我かくおもひかくうたがふものもと人なれば人の執氣ある処を御かへり見有べく候世に所謂天地に通ずるとは天象地理を記し日月星辰の運行を推歩する人の事に候なる程其学を専門につとむる人は思思の念其学精密にも至るべく候へども前段に申せしごとくそれはそれ切にて日は何故一歳に天を一周し天は何ゆゑ一日に地を一周し緯行は何故一度は南し一たびは北するとうら返し候へば是も只然あるによりて然かそゆるのみに候へば達観とは申間敷候借書籍と申候物もむかしの人の面目の見たる所を書つけたる物にて造物者の書たる物にてなく候へば其人の通じたるかたは明にも候へ共塞がるかたの候てたとへば人の物いふには通じ候へども臭をかぐ事は塞がりて犬猫に劣り候様の物に御座候されどもむかしより書にても著はし候程の人はみな常の人には等を躡へたる人に候へば最初書によるもよく候へども天地を得と臍の下に入れて書たる書もなく候へば執する所ありて微を正にとらざれば是又大習氣の種子に候書を大習氣の種子と申を激論の様にも思しめすべく候へども目のあたりある事にて申候はんに人生れて嬰孩の時猶天然の真を失せず其子を一人は浄門の僧となし一人は日蓮下の僧

となし各其師に従つて学ぶ事十年帰り会して各所見を呈せんに十年の習氣氷炭相反し死すといへども其守をかへず嬰孩天然の真をもとむともいかでか再度かへる事を得ん此故に書に因て自得是即徹底造物起り来て自談ずとも此外あるべからずとおもふとも是即習氣人に憑つてしからしむるかはしるべからず候此故に門を尋ねて其主人にあひ其主人に請ふて己が耳目を具する者をば我是を風化の人として従前の事跡を考え荒外の地理など察し候様の事には古今の変化沿革東西の遠近離屬その外百爾の方法我見聞の及ばざる所をのせ世世の人の發明ともあわせ照さんには書まことに主に候へども天地はむかし新しき天地にもあらず今古き天地にもあらずいつもかはらぬ無塩にして我爐中の火即万里の外の火にして我盆中の水即千古の前の水なれば此天地をしり此水火をしらんとならば先此無塩に試みて傍書籍に参考しあはざる処を置きあふ処をとるべし此故に天地達觀の位には聖人と稱し仏陀と号するももとより人なれば畢竟我講求討論の友にして師とするものは天地なり天地を師とする時は古の聖賢より諸子百家今日芻蕘狂夫の言葉にいたる迄等の隔てはあるべけれどもともに文を以て友を会する位にして取舍は各あるべき事に候天地は広き量にて候程にいれざるものなく候容れざる者なく候程に達觀の位に学流の門戸なく候前かた或人来りて我已に此天地を吞却すといひし程に天地大なり天地を吞却する人幾百千万億をか容るらんと謂て咲ひし事ありいかに広大精微を説き出し候ても天地にある広大精微に候いかに超越不群の人に候ても此天地の内に立ち此天地の内をゆく人に候其達觀する処の道は則條理にて條理

の訣は反観合一捨心之所執依徴於正のみに候捨心之所執とは習氣を離るる事にして依徴於正とは徴と見えながら徴にあらざる徴ありたとへば日月は髓に西にゆくの徴あれども其実は東に行く水は正しく火の讎と見ゆれども火は水によつてなるが如し天地の道は陰陽にして陰陽の体は対して相反す反するに因て一に合す天地のなる処なり反して一なるものあるによつて我これを反して観合せて観て其本然を求むるにて候此故に條理は則一有二二開一二なるが故に絜立して條理を示し一なるが故に混成して罅縫を越没す反観合一は則これを繹ぬるの術にして反観合一する事能はざれば陰陽の面目をみる事能はず未陰陽の面目を見る事能はずんば博識多覽聰明穎悟の人といふとも天地の室をうかがひ見ることは得あるまじく候此故に條理を天門の鎖鑰とも申候條はもと木のゑだにして理は其すぢ也是を木に就ていふに其一本の身木根を有し標を有し根には次第に根をわかち標には次第に標をわかち其分るる内子細にみればすぢ有其すぢといふもの何の為のすぢなれば世其筋に従つて運び形其氣の運びによつて成るにて候是を一つ水に移していはんに田に水を灌がんとしては必溝を拵らゆる也其溝即水の理也理のわかるる処條わかれ千條万枝になりしかも其理たち候へば數限なき田地にても水其理に従ひ灌ぐによりある程の田の稻の數數葉の末穎の先までも従ひ達し申候此故に天氣東西に転じ日月順逆の行をなすも川流れ潮浜るも鳶飛び魚躍るも氣理に従つて運ぶ事に候試に何なりとも草木の葉をとりて御覽候べし大理小理をさき眼精の及ばざる迄も理はしき候て氣運び己己が形をなし候此故に理といふ物は天にも地にも

山にも水にも乃至鳥獸魚鼈虫豸菌寓の類にも形は氣の運ぶに成り候へば氣運ぶべき理なきはなく候此故に條理の理は古人の説ける理も其内の事には候へども死活の隔ある事に候人身の脈といへるも即此理にして他物にはあらず理を以て形はなるものなれば美醜長短も皆此理のなす処なりされども是も慣れて繹ぬる貪着なければ人の体のひくつきなりと濟し其上は秦越人王叔和の言を造物者の直決の如く是を金科玉條となして偶疑をきざしても小智は菩提のさまたげとぞ見し一生明堂の蒙茸に取つき候も本意なき事に候人の經脈みな一身に氣血を運ぶ道路にして唯其間氣質の分あり古人經脈の名目をば設けながら其説は分明なる事も不承是又慣るるに安んじ書籍の習氣を執し徴に正による事能はず其造言の始の人を神聖とたてこれを造物者の位に置候是即天地を師とせず人を師とするの弊にて御座候天地を師と致候は反觀の工夫にて反觀の工夫熟し候へば天地になき事はしらず幽と隔て玄とふかく候とも天地にある程の事は推しいたるべき事に候條理は則物中に具する性体にして性もと一体をひらくに至つては一陽一陰相反す故に一は二を有し二は一を開た故に一即二にして二は則万物の位一は則統べざる所なきの位なり初心の間は只仰いで蒼蒼として碧瑠璃のごとくなる物を見て天とおもひ俯して磅礴として土石の填こるを見て地を談じ候是もさる事には候へども是は至つて麓底の天地にて此位より天地を窺ひ候へば所謂天文地理運行の推歩にとどまり候てある物を数え候に過ず候天地とはもと氣物の成名にして氣天を成し物地を成す物に候へば一物あれば一天地万物あれば万天地古人の所謂物物各具一太極にて

恒河沙の世界と申候へば事事数多かる様にきこへ候へ共恒河乃沙の内已に恒河沙の世界をそなえ候へば天地は幾恒河沙をかさねてもつくす事にあらず是即二の位にて候是を二の位と申候は天地かくの如く紛紛擾擾として物多き様に見え候へども只かたちある物ひとつかたちなき物一つ此外に何も物なく候其かたち有物を物と申かたちなき物を氣と申し申候かたちなき物は目にさえぎらず手にさはらず候程にむかしの人も心得違ひて虚空なり無なりとおもひ候勿論地の実に反して其体虚し地の質あるに反して質なく候へば天を質なき虚体の物と心得候へばよく候へどもさなく候てあながちに虚無虚空と心得候ては大なる間違に御座候もし其さす処の空無真の空無に候はば日月星辰もかかる所なく我も物も居る処なかるべし日月星辰も已に其内にかかられ物も我も已に其内に遊ばるれば此虚体あるに相違はなしある物をさして無といふ是顛倒の念ならずや此故に地は実にして体をなす実の体有て山原湖海これに列なり虚の体あつて日月雲雨これに居るここにおいて精細によく思量すれば氣は実体の地中にも虚体の天中にも一杯に充塞して纖毫の罅障なし是を人の身の上にて申さんに此身は則実体の地にして温動を以て立つの氣は則天なり温動にかたちなければとて是をなきものといふべからず其温動の精英即人の神にして名を分ち命ずればこれを心と名づくる也此故に此有体の身は則神の人物にして無体の神は畢竟物の命なり此故に氣聚まれば物結ぶ物結べば神立つ人は小物なり天地は大物なり小物も神と物とを以て成り大物も神と物とを以て成る一一繋立の手足よりしていふ時は天地の物は天地の物にして万物の物

は万物の物なり天地の神は天地の神にして万物の神は万物の神なりここに一一剖析の理を考がふるにかく森羅万象競立つ様なれども資る所に変態ありて給する処に二つなし故に其森羅万象同一神物を混成す是反して合一する処を觀る也何ゆゑに反して合一する処を觀るとなれば物一一と成るかたち本来必和反す本来よく反する故に合すれば一つと成る是を人工の上にていへば柄と鑿となり柄の中高にさし出たるに反して鑿は中窪に落入るなり其凹凸に少しにても無理あれば或はきしみ或はくつきひしと合す反せざれば一を成さざるゆゑなり此故に造物のたくみ反する時は條理粲立すれども合ふ時は混成して其縫目を見ず此故は神はかたちなうして活し物はかたち有つて立つかたちよく其神を容れて活し神よく其かたちに居て立つしからば神その状いかがぞといへば唯活潑潑地俗にいはゆるひちひちなり條理の道次第に天地を剖析し剖析にしたがひて其反態も變化を盡し然して物の分るゝ処各各一神物を成立すれば其なりの出来様と其ひちつきのし様とは千態万貌異なれども火は火の体をなして火のひちつきをなし水は水の体をなして水のひちつきをなし魚鳥魚鳥の体にして魚鳥にひちつき天地天地の体にして天地にひちつく其ひちひちをさして鬱淳といふ事にして混淪は則物立ちて見はるる貌なり古人はもと地の貌を磅礴といふに對して天の貌を混淪といひしなれども今ここに混淪といふは天地をくるめて物となし神の鬱淳に對して形容せる言葉なりさる程に各各成就の上にていへば蝦の小むづかしきかたちも蛞蝓の太平なるなりも皆己己の混淪なり混淪の上にていへば地は塊塊たる内に一点の中をなして居

る者なり其一点小き事形容すべき物なし其一点よく地を載せ天をのせて撓まず中の一点小き事形容すべからずとは一点中に内なければなりもし僅にも内あれば至つて小き物にあらず中の一点内なきが故に其外の大なる事外をなさず外をなさざるもの即無窮也ここにおいて物其中の一点に巍乎として立無際涯にいたるものは大物の混淪なり此故にとこはてもなき物をたててひちひちとする神を其内に活す是を神鬱淳として活し物混淪として立つといひ小物皆己がかたちを此混淪にとり己が神を此鬱淳に資りて天地の間にならひたち各各の作用をなすことなりさて右に蒼蒼として碧瑠璃のごとく磅礴として土石の填てるは廉底の天地と申候半氣に精粗有て物を没露致候先この精廉没露の態を辨じてかく蒼蒼たるものを戴きかく磅礴たるものを踏むことも見え可申其精廉とは廉なる処の氣其体を没すといへども猶其場所をもてり精しき所の氣は物の内に居て其場所をもたず場所をもつもたずといふことは先水入れにていはんに水入れを拵ゆる始め先孔を二つあくる也其二つの孔の作用いかにとおもんみるに此水入れの量水壺升をいるるとみていまだ水をいれざる内に水壺升をいるる程の場此器の内にあり水なき内にも只空物にはあらずすなわち此没体の氣を一盃充て居れりさる故に此器に水をいるる時には一方の孔より氣出づ水出る時には又一方の孔より氣入る是其場のしばらくも虚無にして居ることのならざればなり此故に地のあらざる所は天其場所をなす此場所ある故に日月も此内にかかり山川も此内に列なり風も此内に吹雨も此内に降りわれと物とも皆此内に遊ぶなりここにおいてかたちあるものを露体といひか

たちなきものを没体といふ其体を没すといへども猶其場を有する者は廉中に天をなして精
 中よりこれをみれば其天猶地のごとくなり然して鬱淳の神にいたりては其場を占めず其場
 を占めざる故に水成れば水鬱淳として活し火成れば火鬱淳として活す天地の大なるよりし
 て散小の万物にいたつて其物物に鬱淳たりこれ中庸にいはゆる物に体して遺さずといふ位
 也此故に鬱淳として活し此混淪を立るものは物に体して其体なし没して天をなし露して地
 をなす物は畢竟地中の天地にして蒼蒼の天歴歴の曜塊塊たり無際涯に歸し一大結物の地に
 して鬱淳たる神の成れる天に有せらるる故に天大地小と見る眼は天地を達觀する眼にあらず
 もしよく天地に達し條理に吐食ある事をしらば地なんぞ天より小ならん天又何ぞ地より大
 ならん此故に神物混成の処をみれば物よく宅をなして其鬱淳の神をいれ神よく活をなして
 其混淪の物をたつ只廉底にしてよく没して虚の体をなし露して実の体をなし一大結物中に
 天地を開くも精廉並び分れて没露並び立つ其没する物を天機とし其露するものを性体とす
 此性体といふは露して物を成すの性体にして性一体二といつて陰陽をたつる所の性体とは
 名同じうして差別あり天機は没して天地をなし性体は露して天地を成す天は天地を宇宙に
 なし機は天地を軋持になす成し得て未天地を物に露はさず体は虚実を以て天地をなし性は
 水火を以て天地をなし成し得て已天地を物に露はす体をあらはさざる物宅をなして露はる
 るもの其内に居る此天機性体の四つのは某盤の四つの脚のごとく一脚なく候ても餘の
 三脚自立事を得ず候此宇宙の字を古来古往今来を宙といひ天地四方を宇といふと解したり

是にて大概すみ候へ共言の病有之候程に唯袞衰として通ざるを宙塊塊として塞がるを宇と御覽可被成候されば今布を織り候にも経と緯と合せざればならず家を立るにも箱をさすにも縦横の道具なくしてはならず是経緯也何故に経緯なくては物ならざるなれば此世界も経緯にて織たるもの故其間に成るもの其道によらざればならず候さる程に前つかた竹を網代に組たる団扇に一辞を請はれたる事有之時我

一直一円一経一緯人造有資織諸元氣

と書て遣し候さる程に物ごと経緯なきはなしちかく己が身にとりていへば此身緯となり此命経となるなり其古き解に言の病ありといふは大物にもと六つと定れる数もなく古往き今来るといふ言も是より己往をいひ遣せり先是を小物にこゝろみて漸くに推して経緯の大なる物を知り大なる経緯をしりて天地万物経緯に織らるゝ事をするべし其宇宙の面目を観るには先この露体の天地水火を除きて其経緯をしるべし今日を閉て思惟を下さんにしばらくかりに此天地を掃却したりとも袞衰として通じて押移るの時と塊塊として塞りて物を置く処は除き盡さざるべし袞衰とは水のひた流に流るる様にいつより始るともいつに終るとも其端を見ざる貌にして塊塊とは日月星辰もなくふむべき地載くべき天を分たざれば指すべき東西南北たたず立べき上下もわかたざれども唯いづくを限ともしらざる貌なり押移るを通ずるといひあらぬ処なきを塞がるといふ塞がるとは充塞の塞にして窒塞の塞にあらず窒塞とはかけ樋など水の通ふべきがあり木の葉様の物通ひを閉て水通はざる様の事にして

充塞はいづくまでも行わたりてひまなき事なり其袞袞として通ずる物時にして経となりゆ
 く物みな是を通るによりて万物の路となる其块块として塞がるもの処にして緯と成り居る
 者皆是に居るに因りて万物の宅となる此故に日月此袞袞として経に通ずる時に刻みをつけ
 て夜となり昼となり月となり歳となる天也此块块として塞がる処に位を定めて東となり西
 となり上となり下となる是経緯の本にして小物の経緯知らず織らざれども自然と此則に従
 ふなり天地もと活物機を含んで動止す気は外に居て其方より動き物は内に居て其方よく止
 まるうごく物は円にして止まる物は直なり円なる内に相反して動く故に一は東にめぐり一
 は西にめぐり直なる内に相反して動く故に一は上り行く一は下り行く爰において块块の内
 内直にして持し外円にして転ず転天を成し持地をなして宇宙転持の没天地を成す是皆氣に
 して物ならざるによりて天地有といへども未目にさえぎらず手に觸れず没は露の偶にして
 没あれば露あり天地はもと始もなく終りもなく行末の果もなき物なり是も人に始終ある習
 氣を離れざる故とかく始終を立てざれば心すますざる程に仏氏は此世界に成住壞空などと
 いふ事をたてて空より次第に天地を成し終には壞し空劫に歸し又成し又空するとも説き邵
 康節などは混沌開闢の説を増益して天は子に闢け地は丑人は寅に開け酉の会にして天を閉
 ぢ戌の会にして地を閉し亥にして人をとづるなどと思ひ思ひの自論にて杜撰をなせども皆
 條理をしらざるよりして天人を混ざるの妄説なりさる程に天機性体に先だつにもあらず性
 体天機に後るゝにもあらずたとへば一匹の錦裏と表と一時になり一卵の殼左翼右翼一時に

なるがごとし此故に没中の天地を先説くとして没先なるとするにもあらず露中の天地を後説くとして露後なるにあらず此故に己に一物あれば其物に没する氣を有し露する体を有するなり其有する体二つにわかるれば虚実なり虚の体よく天を成し実の体よく地を成し然して其陰性無際涯より内に収めて地を結び陽氣に噴れて水をなす陽性中の一点より発して天に散じ陰氣に聚められて火を成すここにおいて日月星辰上にかかり山原湖海下に羅なる児女の輩地といふ物は金輪際といふよりはえぬき天といふものは浮玻瓈の様なる物にて天井のごとくはりまはして其間は唯何もなく空空たる空物にて東西南北の海はさきよりさきにひたつづきにつづきて占めつかす月日は地の下をくぐり来る様に心得天地の真形一円球にして地その核子なるをしらず夫天地の真形は地球の円其さし出たる処国となり落入たる処海となり上下四方人取りまわし海もろとも円にして天塊塊たりといへども又円にして天象をいゝるるなりされども人天を載き地をふむの習になづみ水は傾けばこぼるるなどいふ左徴にゐるつき智恵働かず此故に物には必始あり終あり地は平にして天は長く月日は西にむかひ水は傾けばこぼれ火に煎ずれば水はつき水を灌げば火は滅し候などいふ様のなづみつきそれをよき証拠と確く覚込候故何分にも智の働き出ず其事語りても只石に水を投ずるがごとくに候さる程に天地をしらんとならば先此底の天地の形体日月の運行を尋ね知るべきなり運行は推歩家あり形体は天文地理の書あり西洋の学入りしよりこれを実徵実測に試みて次第に精密になれり猶ゆくゆく開くべく覚ゆ世に其人ある事なれば就て学ぶに不自由なる事

なし然してそろそろと自分の眼を生じ古人の謬説に惑はざるべし先初入いづれにも天地をまろくなすべし天地とくとまろく成ぬれば水を倒にしてこぼるる処なく東を西にさしてもまどふ処なしさて昼夜かはるかかはる長短し春秋一時に有之がごとき反観合一の工夫も実に試むる処出来り然して後はじめて我習氣に泥まされしといふことをもさとり稍々智の働出來り達觀の楷梯となりぬべし此故を以て天地達觀の初門は天地の形体日月の運行をしるにしくはなし古今の書籍は牛に汗し棟に充ても猶あまり有る事に候へどもみな習氣の内より書たる物ゆゑ其なづみをさるの良薬と存するは見あたらず候しか申候へば只手まへ申候事のみよき様に候へどもさにても無御座候天地に條理あり分れて絜立し合して罅縫を没する処は天地本来の面目古人ときいたらざる所と自は断じ候へ共むかしの人も皆是天地密合と存ぜず候て説をなしたる人もなく我も亦天地にあらざれば我習氣の僻必多かるべし故に三語數十万言天地に合する処あらば天地に歸し天地に合ざる処晋にて可有之候しかれば必我説御信用に及ばずこれを天地に質して戻る所唯其正を冀ふ事に候さる程に世の師の門に遊ぶ人その師説に違ふ事を心ぐるしく思ひ師家の人も少しはいむ気味あり氣にみえ候是人を以て師とする故に候晋は天地を師と心得候へばたとひ少年輩我より句誦を授け候ても同門の朋友に候へば何かいむ事の候べき如此心得候へど常には申候事に御座候此故に學問に書上の學問と事上の學問と御座候書上の學問とはたとへば論語に季文子の三度おもふて行ふを孔子の再度すとも是可なりとの給ひしいや再度せば是可なりと其当否を論じ候様の事

なり是を事上にうつしていへば多念にわたり猶豫狐疑致す様になり果決なきは用立ず早く決断覚しき場あり幾度も千慮万思の上に決すべきあり再たびせば可也といふ時再たびせば工夫を下し再びすとも可なりといふ時大概是に違はなしと見定めたりとも猶熟念して後悔を遺すべからざるの工夫を下すべくして住家の是非にあづからざる処あり候此故に書生の学問は其師の立説を主張する癖ありてそれに我意をくはへ敵味方とわかるるなりしからば文義はいづれに見ても苦しからずと聞給はば是又我言を執し給ふといふ物に候さる故に親もてる人は徂徠学にても朱子学にてもよく候親に孝なる様に学びたく候鎗つかはん人は素鎗にても十文字にてもよく候人をつくり程になり度候それを猶是よく彼よしと論じ候はあたらぬと申にてはなく候へども畢竟手前かたやの論にて上戸下戸の昔より饅頭と酒の美不美を争ひて今に定まらざるがごとし天地の是非善悪といふものは学者もわかれ素人もわかれ君もにくみ民もにくみ仏者もほめ儒者もほめ候物に候それ者同志の是非得失をみな己がおもふままにせんとおもふは世の中の人の顔を一つ様にせんとおもふ様なる者にて候造物の手にさへ合ざる事を己がおもふ様にせんとおもふは大なる不了見に候さいへば又しからばみな悪みいとふ悪もつくり直されまじき程にといはゞ又さきの言になづめる也とかく天地は活物故に活手段なく候てはよき事も用をなし難く候天地隠さず人に示し候へば書を読むにも人にきくにも及ばざる訳には候へども又書にもより人にも問はず候へば智も開け不申候程に愚蒙の言も達観の階梯とも思し召し候は天地に御合せあるべく候諸家の人のいふ

をきくに我道はかく立るなり彼はかく立るなりなどいふ也天地は我立る者にはあらず其立ちたる者に我したがふ事に候へば天地を全観する事も人事を精しく察する事も唯有る通りそのままにみるより外の細工なく候さる程に合点致候も火は合点せざる前の通にもえ水は合点せざる前の通にながるる事に候故に名は人のつけ候物に候へば難波のあし伊勢の浜萩ともかはるべく候へ共実は我を以てみだるべからず候さる程に天機性を以て此天地を全観する事を得ば経通緯塞の内虚動実地の天地を容れ日月上に転じ水土下に持し我と万物と其路をゆき其宅に居るの真面目を得んさる程に我目物に目くるめく間は万物紛紛擾擾たるがごとくなれども己に天地手に入りてみれば天地位を定め火上に照し水下に湛ふる迄にして是が活物なるにより綱纏摩盪して有意温動の動物と無意冷止の植物と只此二種を醸し出して其物と神とを千態万貌に変化するなれば至擾還て至簡の至りに候右の趣に候へば天地をしるは我私の意を入れずあるままに天地に従ひて天地を師とするにしくはなく候されども天地物いはず人人のおもふ様に見らるる物にして正す処の人千差万別に候へば口舌を以て争はんには盡期なく自得にしくはなく候されども其自得も心心にて天地はあちなる物に候さる程に組て落る処は臭味同じきもの打より語らふ事に候さるによつて我説人に強不申此頃も人來りて我説を破する人ある事共物がたりしける間それにてよしと申てかへし候是も一無窮非も亦一無窮無窮の間に遊ぶことに候しからば賢にももし古今に歴試し天地に考え合処ありとせば拙き言も魚兔の筌蹄となるべく候よつてかさねて申入候人は人の境に住

み候へば人よりして智をひらくも抛なき事に候されど智をひらくに推すと反すると心得べき事に候人よりして人を察するには柯を執て柯をきるの理にて我悦ばしき事人の悦ぶ事にして我かなしき事人の哀しむ事なり己にあらざる物を察するには火の好み水に推すべからず魚の好み鳥に推すべからず故に反觀にあらざれば我にあらざるものに通ずる事能はず推觀にあらざれば人に恕する事能はず恕の義は俗に身をつみて人のいたさをするにして古人の解も数多みえ候へば略し候反觀前にも申候へ共又一物を挙げくり返し動植の上に就て申さん動は鳥獸の總名にして植は草木の總名なり然して動は意あり体温にしてよく動く植は意なし身冷にしてとどまる動は内虚するを以て養を上口より内にとり植は内実するを以て養ひを下体より表にとり動本を上にし末を下にし植本を下にし末を上にし動牝牡よりして子を下竅に生じ植花実よりして子を上頭に結び動地を離れて横行し植地に就て豎立し動の枝は数定りて下りむかひ植の枝は数定まらずして上にむかひ動生ては暖に死しては冷ゆ植生ては冷えかれては暖也といふがことし山水にていへば山は本合して末わかれて中高く水は本わかれて末合して中おちいる昼夜にていへば昼は地上の物を示して天上の物をかくす夜は天上の物を示して地上の物をかくす是を天地の物にいへば天にある物は燥てうかみ夜明を発す地に在る物はうるほつてしづみ昼影をおさむ天地の物皆かくのごとく反すれば天地の物をつくさずんば其反をかぞへ終るべからず故に反せざれば天を知る事能はず推さざれば人をする事能はず已に人と生れては才古今に秀でたりとも眼天地を空すとも人を出る

事は能はざる也然る時は学ぶも修するも人事なり是を以て入て内にありても出て外にありても貴うして君公の位にありても賤しうして奴婢皂隸にいたりても只人の間なれば只孝悌忠信礼義廉恥の間也もしこの人の外に道をたて人事に害をなさば是通天下の非なるべし故に道は衆を安んずるより大いなるはなく功は衆を利するよりすぐれたるはなく候これを以て上一人より下億兆にいたる迄其品にたがひはあるとも天生生の徳にならひ天物を損はず分分体造化をたすけんと思さば天地の大徳にそむかざるべきか人生れて各己に其一箇の天地を有し各其混淪の体を立て各その鬱淳の神を活すれば権を以て下を御しし是を控掣すといへどももし其徳を失すれば人情糜沸して其権もちゆる所なし其心の鬱淳其身の混淪と同異居を同じふすれば千人の面おなじごとく千人の心同じ千人の面同じ千人の面同じからざることく千人の心同じからず故に世に処するの道意智の明研究すべしといへども人情の変化熟せずんばあるべからず民之失徳乾餼以て過つと申もこの処にて御座候さる故に世の中の或はみだれ或は治まり或はたすけ或は殺し悦びかなしみ泣うたふも皆皆の鬱淳の所作にしてよく此鬱淳の所作をしらば己を修め人をもよくし長にかの天命にやすんずべく候かしく

安永丁酉臘月二日

孖山 三浦 晋

再答ニ多賀墨卿ニ

終日駟不_レ得_二其到_一。処非_二馬力之罪_一。実取_レ途之非也。臆

腑之說。漢與西洋雖有精麤。未得于條理。晉說之數
 萬言。猶未脫藁。而子問而不已。欲答之。則非短簡之
 所盡。欲不答。則殆負友誼。託秦伯龍南還。陳一二以
 塞其責。夫臟者肉也。腑者皮也。腑以保內。臟以營外。
 蓋天地一氣物。物虛實其體。以開天地。氣陰陽其性。
 以活水火。虛體為大物之府。實體為大體之藏。水火
 網緼於其間。乃化動與植。是故動植元一之分。雖反
 意之有無。機之動止。俱資之於天地之給。是故臟腑
 之理。若近取譬。則觀之於一穎之粟粒。亦足通之於
 己也。蓋粟之為物。稔能保米。米能營稔。稔米相得。生
 意通其中。稔米相失。生意絕其間。極之於其所給。則
 天轉以保地。地持以營天。推之於人間。人能營室而
 居。室能保人而立。唯以物分而異其態焉爾。是以人
 身一臟一腑。臟則在內之肉。以能藏氣。腑則在外之

皮。以能容質。古之人不能取內景以融之於外。體故
 歸皮肉於外。歸臟腑於內。雖立言固然。融之於天地。
 則臟腑與皮肉同一物。以分用有意之文。終致皮肉
 臟腑之別。故何則咽胃腸腠。皮而裏物。漸踰肛門。與
 所包身首之皮合。臟者為變於皮肉。筋脈以維之。動
 植已隔意之有無。無意者不用用意之文。有意者不
 得不用用意之文。於是植無臟腑之目。而動兼皮肉
 之文。蓋人身以頸分上下之體。上具耳目鼻舌之文。
 交彩聲臭味之氣於皮裏。下具手足陰乳之文。接配
 嗣器地之質於皮表。內而咽胃腸腠。以皮納畜。收送
 水穀便溺之質。心肺肝腎。以肉保運化。持天地神本
 之氣。故臟腑本別體。其不同。猶衣與絮。故其本一臟
 一腑。各分內外。為二臟腑。各各拈親疎之用。為二臟
 二腑。古之立言者。知臟腑之在內。而不知在外。其內

者亦從目之所觸而數。不知剖析之理有所反而合焉。五其臟數而不合。則又六其臟。於是其所可統而反剖之。其所可剖而合之。其所可剖而合之何。咽以能納水穀。其體當虛。胃以能畜水穀。其體常實。其當數之也。捨其實者。捨其虛者。腑者一條之皮囊。岐有膀胱。但畜外来之客質。而胆不與腑相與。膽者屬系。其系上屬肝臟。下著胃口。化精於飲食之氣。為脈之根。與臍之收天氣為息之原對。蓋兒之在胎。宮中卵體。閉氣於其中。無假于天息地食。唯一條之臍帶。繫胞以與母通血脈。生動活育。唯恃斯一路。與菓蓀之帶。承營養於本幹同矣。其已出胎也。混沌正死。臍帶已斷。闢竅於天門地戶。嘑噏已通。飲哺已求。於是先天之養。移居後天之室。於是營養之氣自胆起。衛護之氣朝宗于臍。故膽後天而斷臍。先天之氣。而說者

取以屬腑。顛倒錯置甚矣。其所可統而剖之者何。命
 門者腎之一片。脾者肝之一片。有臟必有薄膜。包之。
 何特於心立包絡。耳目鼻舌。系皆繫于心。而說者配
 之於五臟。雖是失實微。猶言其所本也。至手足臍乳。
 則汎而不問。其他若肝本著右。而謂之著左。脾本在
 胃下。而謂之在上。脈與經同出心。而有氣質之分。而
 不知焉。唯憤憤而說之類。不可復枚舉。夫儒者以通
 三才而自負。至觀人之形骸。讓之於醫典而不察。醫
 人無識。不知素靈周季佞者之妄言。意若有造物者
 為之面授口訣。至若五行配當。則最能糊人之耳目。
 人身有氣液骨肉。何必有木火土金水焉。於佗之四
 行。則一之。於火則分君相。以為造化之枢要。無用之
 辨。不急之。聚訟譎譎。弇嚙盈耳。是猶方行者間路
 於越。揭標曰北。於是乎北轅走越。取途愈遠。其迷

愈深。不亦悲乎。雖然千古之成說。人皆濡目於茲。染心於茲。未可猝以示條理。故今唯為子言。勿遺諸傍人。致他闕。其詳姑俟所著成。

安政己亥四月望。

【参考】訓読文（三枝博音著『梅園哲学入門』（第一書房、一九四三年六月、第一刷）所収）

終日馳つて其の到處を得ざるは、馬力の罪に非ず、実に途を取るの非なり。臟腑の説、漢と西洋と精麁有りと雖も、未だ條理に得ず。晉之を説くこと数万言、猶未だ藁を脱せず。而も子問うて已まず。之に答へんと欲すれば、則ち短簡の盡す所に非ず。答へざらんと欲すれば、則ち殆んど友誼に負く。秦伯龍の南に還るに託して一二を陳べ、以て其の責を塞がんとす。夫れ臟は肉なり。腑は皮なり。腑以て内を保ち、臟以て外を管む。蓋し天地は一氣物。物其の体を虚実にして以て天地を開き、氣其の性を陰陽にして以て水火を活す。虚体は大物の府たり、実体は大体の蔵たり。水火其の間に綱縊して、及ち動と植とに化す。其の故に動植は元一の分、意の有無・機の動止を反すと雖も、俱に之を天地の給に資る。是の故に臟腑の理は、若し近く譬へを取れば、則ち之を一顆の粟粒に觀

るも、亦之を己に通ずるに足るなり。蓋し粟の物たる、稗能く米を保ち、米能く稗を営む。稗米相得て生意其の中に通ず。稗米相失へば生意其の間に絶ゆ。之を其の給する所のものに極むれば、則ち天転じて以て地を保ち、地持して以て天を営む。之を人間に推すに、人能く室を営んで居り、室能く人を保つて立つ。唯物分るるを以て其の態を異にするのみ。是を以て人身は一臟一腑、臟は則ち内に在るの肉、以て能く氣を蔵し、腑は則ち外に在るの皮、以て能く質を容る。古への人内景を取つて以て之を外体に融す能はず、故に皮肉を外に歸し、臟腑を内に歸す。立言固より然ると雖も、之を天地に融せば、則ち臟腑と皮肉とは同一物、以て有意を用ふるの文を分ち、終に皮肉臟腑の別を致す。故如となれば則ち咽胃腸脬、皮にして物を裹み、漸く肛門を踰えて身首を包む所の皮と合す。臟は鬻を皮肉に為し、筋脈以て之を維ぐ。動植己に意の有無を隔つ。無意なる者は用意の文を用ひず、有意なる者は用意の文を用ひざるを得ず。是に於て植は臟腑の目無く、而して動は皮肉の文を兼ね。蓋し人身は頸を以て上下の体を分ち、上に耳目鼻舌の文を具えて彩声臭味の氣を皮裏に交へ、下に手足陰乳の文を具へて配嗣器地の質を皮表に接ふ。内にしては、咽胃腸脬、皮を以て水穀便溺の質を納蓄收送し、心肺肝腎、肉を以て天地神本の氣を保運化持す。故に臟腑は本別体、其の同じからざる。猶衣と絮とのごとし。故に其の本は一臟一腑、各々内外に分れて二臟二腑と為る、又各々親疏の用を拈げて二臟二腑と為る。古への立言は、臟腑の内に在るを知つて、外に在るを知らず。其の内なる

者も亦目の触るる所に従つて数ふ。剖折の理の反して合する所有るを知らず。其の臓を五とし、数へて合せざれば則ち又其の臓を六とす。是に於て其の統ぶべき所にして反つて之を剖ち、其の剖つべき所にして之を合す。其の剖つべき所にして之を合すとは何ぞ。咽は以て能く水穀を納れ、其体常に虚、胃は以て能く水穀を畜へ、其体常に実。其の数ふるに當つてや、其の実なる者を拾つて其の虚なる者を捨つ。腑は一條の皮囊、岐に膀胱有り、但し外来を畜ふるの客質なり。而して膽は腑と相与らず。膽は属系にして其の系は上は肝臓に属し下は胃口に著く、精を飲食の氣に化し、脈の根を為す。臍の天氣を収め息の原を為すと対す。蓋し児の胎に在るや、宮中の卵体は氣を其の中に閉し、天息地食に仮ること無し。唯一條の臍帶、胞を繋ぎで以て母と血脈を通ず。生動活育、唯斯の一路に恃むこと、菓蘆の蒂營養を本幹に承くると同じ。其の已に胎を出づるや、混沌正に死し、臍帶已に斷つ。竅を天門地戸に關き、嚆嚆已に通じ、飲哺已に求む。是に於て先天の養は移つて後天の室に居す。是に於て榮養の氣膽より起り、衛護の氣臍に朝宗す。故に膽は天に後れ、而して臍の天に先んずるの氣を斷つ。而るに説者取つて以て腑に属せしむ。顛倒錯置も甚し。其の統ぶべき所にして之を剖つとは何ぞ。命門は腎の一辺、脾は肝の一片。臓有れば必らず薄膜有りて之を包む。何ぞ特に心に於てのみ包絡を立てんや。耳目鼻舌は系皆心に繋がる。而るに説者之を五臓に配す。是れ実徴を失すと雖も、猶其の本とする所を言へり。手足臍乳に至つては、則ち汎くして問はず。其の佗、

肝は本右に著く。而るに之を左に著くと謂ひ、脾は本胃下に在り。而るに之を上在りと謂ひ、脈と經とは同じく心に出でて氣質の分あり。而るに知らず、唯憤憤として説くの類の若きは、復た枚挙すべからず。夫れ儒は三才に通ずるを以て自ら負へども、人の形骸を観るに至つては之を医典に譲つて察せず。医人無識、素靈周季は佞者の妄言なるを知らず、造物者の之が為に面授口訣する有るが若くに意ふ。五行の配当の若きに至つては、則ち最も能く人の耳目を糊す。人身に気液骨有り、何ぞ必らず木火土金水有らんや。而して佗の四行に於ては則ち之を一とし、火に於ては則ち君相を分ち、以て造化の枢要と為す。無用の辨、不急の口。聚訟譎譎、聳嚙耳に盈つ。是れ猶行者の路を越に於て問ふに方つて、標を掲げて北と曰ふがごとし。是に於てか轅を北して越を走る途を取ること愈遠く其の迷ひ愈深し。亦悲しからずや。然りと雖も千古の成説、人皆目を茲に濡らし、心を茲に染む。未だ猝かに以て條理を示すべからず。故に今は唯子の為に言う。諸を傍人に遺して他の鬪を致すこと勿れ。其詳しくは姑らく著はす所の成るに俟たれんことを。

安永己亥四月望

梅園拾葉卷之下

豊後 三浦晋 安貞 著

加藤修 子睦 輯

三答三多賀墨卿

神氣本氣の分、並に前書膽者其系上属_二肝臟_一、下着_レ胃、只化_二精於_二飲食之氣_一、為_二脈之根_一、与_下膈之収_二天氣_一為_中息之原_上对の文、かさねて御尋に御座候。医家素難を金科玉條とし、從來依_レ様て葫蘆を画き候故、其垢心を染て、物の真体みえかね候。條理の道は、天門の鎖鑰にして、流に沿て分れ、源に沂つて合し、聊も意巧造作にて安排をなすべきものにあらず候。蓋大物より万物に至つて、其物を成すにおいては、氣天物地の中性体といふものを具す、然ふして体よく用を分ち、性よく体を分ち候。神本の二氣は、唯人にのみ有る物にはあらず、もと天の有するものを人資て己が有とするものに候。本氣とは体成てよく其体を用ゆるの氣也。神氣とは性具してよく其性を運ぶの氣なり。故に神氣人におるては其有する所の意也。本氣人におるてはかく活動する生の氣なり。意中に心性あり、心の運びて思ひ慮かり知り辨ゆるものを意智といふ。性の感じて愛憎欲惡するものを情慾といふ。即是性にして、これを運して、守禦の態、和激の聲、行止予奪の事をなすは、其才也。生中に

天より得るものあり。天より得るもの、物に依らざれば立難し。其物によるとは、天氣を呼吸して、よく表を衛り、地質を飲食して、よく裏を営み。即ちこれ用にして、これに体して、臟腑の文、筋骨の維、膏血温動の物をなすは其体也。人かかる身をいかがして有るぞとおもふに、これもと天の有する処にして、それを人に給し、人これを天にとりてなるものにして、給資の間に始継の二氣あり。資始むるもの、保持奉役の精力なり。資継もの、營養衛護の息食なり。資を始むるものは、天に得るものにして、資て継ものは、息に天氣をかり、食に地質を資りて、其資始の氣を營養衛護するものなり。故に精力は營衛を以て立つ。營衛敗れをうくれば精力困しむ。精力已に盡れば、榮衛用る所なし。故に保持奉役、營養衛護して、其本氣全く、思慮知辨、愛憎欲惡して、その神氣全し。神は神妙不測の靈にして物混淪として、立つの中に活し、物は磅礴無辺にして、神鬱淳として活するの表に立つ。立に就て本氣といひ、活するに就て神氣といふ。万物に通じて皆しかなり。蓋其本氣の立や、資て始むるものあり、資て継くものある故に候。神氣の活するや、性感ずることあり、才運することある故に候。精いかんかして此身を保するとなれば、内持するものあり、大物にていへば地なり。外保するものあり、大物にていへば天なり。力いかんかして此神を奉ずるとなれば、物其神を奉ずるの力あり。人にていえば臣の奉戴也。氣其物を役するの力あり。人にていへば権柄也。性いかんかして感ずるとなれば、情慾好惡するを以てに候。才いかんかして運するとなれば、意智よく知運するを以てに候。こゝに於て神氣

神を用ひて意をなし、本氣物を立て、人をなし候。是を以て物を見て善と知り、悪しと知り、愛憎慾惡の感応より、或は予へ、或は奪ひ、或は活し、或は殺し、誉め毀り、興り亡ぶるも、共に有意の所作にして、思ひに運び、知るに辨まへ、好惡に感応いたし候。このゆゑに神氣は君の位にして、本氣は民の位なり。君民の事、位をいへば、君尊く民卑し。序をいへば、民本にして君標なり。其故は人衆ありてこれを治むる為に、君長たつ。君長たちて後、人衆を設くるにあらず。然れ共位は君在上。然ふして号令控掣の權をとる。民在下。然ふして奔走驅馳の役をとる。故に本氣は民の如く、神氣は君の如し。本氣本にして、神氣標なり。神氣尊にして本氣卑し、故に奉ずるは、神氣の為に基をなして、其神氣を奉ずるなり。役するは、神氣の為につかはれて、これに奔走驅馳するなり。此故に物混淪として立ものは、本氣の幹するなり。意鬱滯として活するものは、神氣の運するなり。其本氣即天にして、神氣即人なり。天人の差別は、有意無意の間にて御座候。古來有意無意の辨未_レ立候故、先達も是を混淆して、天を觀る事、皆人意の私に落候。此故に天は無意、人は有意と分つて、其人の中にも亦天人あり。其故は天成_レ人、人成_レ于_レ天を以てに候。天の成す処は無意にして、人の成る所は有意に候。是又人の天人を平分する故に候。其天成_レ人者は、本氣にして、人成_レ于_レ天者は、神氣に候。此無意なる者あつて生の本をなし、有意なる者有て生の精華を發する事に候。先此大分を御理会ありて下文御熟玩可_レ有候。尤文面は天にあるものを書留候にて、文面を離れ、真物をよく御察し可_レ被_レ成候。真物よく画前

にあらはれ候へば、拙文に謬誤あらば、謬誤直に御目にかかるべく候。夫氣は物を離れず、物は氣を離れぬ物に候。古人天地未_レ成以前溟濛混沌たる氣のみある様に説きなせしは、氣を知らざる故に候。故いかんとなれば、物はなく只氣のみはある事能はざるものに候。火といへば焼るもの其中に発し、焼るといへば火其中にあるが如し。故に身独活せず、神により靈をなし、神独立たず、人の体を宅として活し候。人の体は保持奉役天に得るものにして、營養衛護の物によるに依て立つ事に候。衛護とは、今提燈に火袋あるも、衛護させんとの説也。夫火袋の用たるや風吹き雨降りても、これが外を衛護するにより、よく燈の防ぎをなすなり。營養とは、提燈の蠟燭を、具ふるが如し。蠟よく火を養ひ、其天に得る処の火の光をも熱をも営み継で、とこしなへにあらしむるが如し。火袋よく外来の風雨を防げども、膏膩の養なき時は火存せず。膏膩これを養へども、外来風雨の防ぎなき時は火又立たず。保持奉役は、天より得るよりしていへども、さとしやすきにしたがひ、提燈の器につひていふに、蠟燭の營養によれども、蠟燭又台なければ立たず。台また箱棒くさり等の保持をとり、よく其火を奉じ、火よくこれにとりて、光を役ず。火は膏と心とに養を資り、膏心よく養を火に給し、細縊その間になり、火を営し出す。万物皆しかれば、人身もとより同一理にして、其常に寒を衝き暑に觸れ、霜露を犯し、雨雪を凌げども、これをして病しめざるものは、わが保持奉役するものを衛護すればなり。もし苟此衛りを失へば、風雨寒暑瘴癘の毒、こもごも外より傷るなり。營は一身氣血精神の仕出しにして、細縊ま

た其内になる故に、男授け女受け、子その内になり、母乳し子吸ひ、養その内になるも、同じ細縊の営みなり。春は花さき葉生ひ、秋は葉脱し実結ぶも同じ天地の細縊なり。故に養は生生を物給し我資るの間にして、水穀塩蔬酒漿肉味の給する所を資り、我気液骨肉となし候。此營養に傷れをうけ候へば、気液骨肉營養の源竭きて、吐瀉閉癰血液湧溢せざれば、乾枯骨立を致し、終に天成の元気を賤賊す。故に函籠全ふして、膏膩盡るも、膏膩備つて、函籠そこぬるも、提燈の用成ざるにおゐては一に候。其營養といふものは飲食胃に入り畜ふるに、肝上より覆ひ、脾下より捧げ、胃をさしはさみて、鼓動をなし、飲食の精をとり、転じて気液骨肉となし、一身に周布して、造化の用をなし、其查滓腸中に下り肛門に出づ。小便は古説異同ありといへども、其大概水穀一所に混入し、然して後、便溺泌別すと觀る故に、小便も泉を筧にてうくる様に思ひなし、其泌別の処をそれとさし、或は膀胱に上口ありなど、壁越し推量の説のみにして、徹見の説なく候。阿蘭陀などには、奇巧勝れたる国ゆゑ、微細の器あり、よく其小経を導ひて、水を膀胱にうくる隧道を得る術もありと聞り。是れ実徴の上然あるも知らず。よしや此隧道あるにもせよ、溺の道路全く其道より洩れ注ぐとせば、造化の用はなし難かるべし。予が觀る所を以てすれば、便溺の事大に同じからず。大便は右いふ如く其道あり。小便は其口なし。此処よく工夫すべし。人は小天地といふも、造化に異なる事なければなり。易にも雲行は雨施して、品物形を流くといえり。先造化の用を觀るに、雲天を覆ひ、雨上より下るといへども、雲雨はもと地の湿氣蒸

蒸として騰り、清際に閉られて、雲のかたちを顯はし雨を結ぶ事、口より出る氣の物なれば消て見るべからざれども鏡を前に置ときは曇りとなりて露を結び候。是も小雨露に候也。今雨降らんとして礎湿ひ絃緩ふも、雨の本を水土にとるの一徴に候。是を以て造化の状下に水土の質あり、此もの氣の綱縕により、忽蒸騰して雲霧となり、雨其中に結び、むすべば其質空にとどまる事能はず、下り灑ひで万物を潤沢生育し、潤沢生育の餘は、終に川谷に注ぎ海に歸し候。若此地際水土の氣天間に充溢せず、夫より只下ざまに流れ入らば、万物を潤沢生育することはあるべからず候。然れば我天地造化の用も知るべく候、水穀の質胃内に畜へ、其氣胃外に蒸騰し、肝脾の鼓動によつて、一身に充溢し、潤沢生育我身に雲霧雨露の用をなし、其查滓下に歸し、膀胱に滲入し、川谷の用をなす。かくの如くにして、尿に其口あり溺に其口なきの態、然らざる事を得ず。是を以て營氣は下飲食を胃中に畜ふといへども、消化運転の用は、全く肝脾の鼓動にあり。臟腑といふものは、腑は皮を以て相続き、筋よく維持す。臟は肉にして箇箇別物、脈あつてこれを聯綴す。脈といふものは肝に殆まり、腎に至り、枝樞蒙茸として、一身いたらざる所なし。飲食の精氣、氣液の運動みなこゝに導かれて行と見えたり。膽は肝葉の内にかくれ、精汁を畜はえ、脈の根となり、膽外枝樞あり上肝葉の内に著き、下胃の瀉口のさき腸の上頭、西洋の人はここを十二指腸といつて、虬虫の窟窟とする所あり。その上に著く。是腑と臟との接する所にして、是より脈に接するに依て脈根なり。營養の氣は地脈に資り、衛護の氣は天氣に資る。地

臍口を門とし、天氣鼻を門とす。それより喉嚨に下り肺に入り、その經心に着き、其末臍に朝す。前書に先天後天の氣といへるは、馴たる言を以ていふものにして、先天とは資て始むるの謂にして、後天とは資て繼ぐの謂なり。それ兒の胎に在る、資て繼ぐの氣未用ひず。故に口鼻の二門猶閉づ。此門開くるや兒即生る。生るるや呼吸飲食資て繼ぐの氣を開く。我ある人にきく事あり。兒初生已に死するが如き者、臍帶を按ずるに、淳淳として動氣あるもの、猶生を望むべし。急に艾をとり臍帶に灸すべし。活する者ありと。我未試ずといへども、亦此理なきにしもあらず。呼吸の事、呼ものは故きを出し、吸ものは新しきを納れ、其事は飲食の精をとり、査滓を去ると同じく候。故に膽は營元なり。臍は衛元なり。營衛は一身を立るものにして、資て繼ぐの用有し之候。精力は一身の立つものにして、資て始むるの用有し之候。精奉ずるとは、物の神を挑ぐるにて、提燈にていへば、蠟燭たてにて御座候。營養すべき蠟燭もあり、衛護すべき火袋もあり、照すべき火ありても、蠟燭たての奉なければ提燈ならず候。此蠟燭たて真直に下より燭火を奉じ候へば、營養衛護もとのひ、そこにて火の照す事明かに、高し卑し、水あり石ありと見する故、其火に教へられて、上るとも下るとも飛ともまはるとも、其精力其令に従へば其役をとるなり。是を力役すといふ。故に奉は上につかゆるにして、役は上につかはるるなり。これを以て手まひ足踏み、目見耳聞き、大小便行んと欲れば、其道を開き、忍ばんと欲すればまどろみても其守りを失はず。是を力の役といふ。其力役を執らざるに至りては、遺尿遺失、手足癱瘓、精神恍

惚、百患萌動する事に候。故に精力は、資格の氣にして、營衛を天地にたのむ。營衛は食繼の氣にして、精力を天成にたのむ。精力已に盡れば、營衛存する事能はずして、我天地閉づ。營衛病めば精力疲る。精力支ふる所あれば營衛医すべし。思慮知辨愛憎欲惡の神も、これを己が本宅として、用をこの上に施すに候。以上の條理とくと御考候ば、神氣本氣の別可_レ為_三判然_二候。天成_レ人、人成_レ于_レ天の故に、有意の神は初生の時は猶混沌として開けず、老後は朦朧たりやすし。昼よく明たりといへども、夜は必本氣に歸す。前に申す如く、神本の二氣、天地も万物も皆これを具へ候。されども物によつて長短有_レ之候。天地は神本に優劣なし、故にかくの如く悠久なり。物ふたつながら全ふせざるは二の態に候故に、神氣長ずる者は本氣短し、本氣長ずる者は神氣短し。植物本氣に長じ、動物神氣に長ずるは、其大分にして、其神氣に長ずるの内又長短あり。又人よりして鳥獸を觀るに、鳥獸神氣に短し。故に本氣長ず。是を以てその生たる生冷堅硬の物を食つて傷られず。雨雪霜露を衝て犯されず。産育困しまず。喜怒相引かず。人は密室に爐を擁し、重綿醇酒に寒をふせげども、風軒水樓にたかく倚り、絺綌水漿に暑を避れども、猶時として時氣に病む。米は糠を去り、肉は骨をさり、猶水火の調熟をかり、妊娠の調護、嬰孩の抱負、本氣の短きことかくの如し、本氣の短きこと如_レ此を以て、神氣の長きこと万物にまさる。是を以て天の遠きも是を測り、地の厚きも是を察す。羽翮なしといへども、空に翀るの鳥を繳し、鱗鬣なしといへども、水に潜むの魚を漁す。肌膚寒暑にたへざれば、麻を績み、繭を繰くり、支体

雨雪にたへざれば、傘履を製し、神氣の有餘を以て本氣の不足を補ふ。是より拈めて、二氣の物たる所、御考可_レ被_レ成候。以上。

安永庚子暮春

戲示_二学徒_一

- 一、学問は飯と心得べし。腹にあくが為なり。かけ物などの様に人に見せんずる為にはあらず。
- 一、書物は金かしの帳のやうなるもの也。金なき人のもたらむは、渋紙ふむほどの用にこそ。
- 一、学文はくさきな様なり。とくとくさみをさらざれば用ひがたし。少し書を読めば少し学者臭し。餘計書をよめば餘計学者くさし。こまりものなり。
- 一、学文を芥の様におもふべからず。上に浮たがる程に下地の水も今はのまれず。
- 一、学文は置所によりて善悪わかる。臍の下よし鼻の先悪し。
- 一、学文は軽業のやうにするがあしし。軽業は人を目の下に見おろし、人の天窓をふむものなり。
- 一、衣裳うつくしくかざり、人にすかれんとするは売女なり。人の見る時所躰をなし、人に誉られんとするは歌舞戲のものなり。今の学者はどふやう此真似する様なり。

一、碁のうち様は、いつにても、先をとればまけぬものと、我もしれり。とかく道理はのみこみよし。態のきかぬが笑止なり。

一、足の皮はあつきがよし。つらの皮はうすきがよし。人諸共に小賢しく口はきけど、行ひは女童に見限らる。さる故面の皮あつくなり、足の皮うすくなり、株ふむ事多し。よく心得てつつしむべし。

長州赤間関二人のうかれ女

長州赤間は文字の関と相望みて、山陽鎮西の間只一帯の海を隔てたれば、行かふ船たへず。さる故にいなり町とて花街家ごとに遊妓たくはへて、水は花を誘ひ花は水に伴ふが中に、大阪屋浅間といへる者あり。もと同じ国なる船木といへる里の貧しきものの子なり、朝食夕食の烟もたえぐなれどふたりが中にひととなりて十三になれり。このとし母いたくなやみけるが、卯月の頃むなしくなりぬ。歎きのもとに秋も来ぬ。鰥ぐらしの世を経がたくや思ひけん。父此子にむかひいひける様は、家貧しくして母なく、霜雪のふせぎも心のままならず、萩にはたよりのかたもあり、しばし行てんとて、携へて出けるが、娘みちのさあらぬ様なるをあやしみ、萩にはかくは行まじものをといひければ、いなとよ是は関のかたへ通ふ道なり、かなたにて少しの用事ととのへ、夫より萩へ行べしとて、程なくかの大阪屋へ行、十年期にうり、金とり、其身はやがて帰りけり。娘始て其事をしり、唯ふし

沈み、なき暮しなき明しけるが、せんかたなければ日数経つつやや心とり直し、これもそむかましかば、不孝ならんとおとなしくつかへて翌る十四にはうかれ女のつとめに出けるが、只ひたすらに故郷の父こひしく思へども、山川へだてぬれば、便だにおもふままならず、色色と心を盡しやや少しの才覚し、人して関のかたへ下り給へとすすめければ、父も世渡る道にくるしみ、殊に我子の招くかたなれば、やがて来り、これをたのみに家かりて住けるにぞ、浅間も少し思ひなぐさむ事となりて、主に願ひ日ごとにとふていたはり、心あしき時つきそふ程の事こそあらね、心のおよびつかへける。此処の法に十年身をうり、期あきて三年の礼奉公つとめ、其始ありつきし日にいとまとることなり。心ならざる月日も水の流るゝごとく十三年過し、いとまとるべき年きたれり。さあればことし四月母十三年遠忌にして、いとまとるべきは八月なり、浅間おもひ煩ひける様は、かかる身して母の遠忌つとめんも心ぐるし。苦しとていかがせん。只願くはもとの身となりて、位牌にむかひ手を合せば、艸葉の陰のなき魂も、手むくる水のいかに心よからんと思ひ、かつ言葉にももれければ、此事いひ伝ふる人有て、孝女の志とげざらん事を本意なく思ひ、主にかくときこへけれども、わきの妨とや思ひきかず。これを哀れときく人多くなりて、男のみかは女まで其夫にすすめ物し金遣し、終に隙とらせぬ。浅間いはんかたなくうれしければ、家にかへり僧を請じ、本意のごとく仏事つとめ、終には船木なる伊兵衛といへるをまねき、うら町に北国屋と号し、佗しき住居ながら心よく父につかへけり。抑此伊兵衛といへるもの、

いかなる縁にしぞ、とどふに、浅間いとけなき時、大阪屋に同じく在けるが、かりそめの枕かはし馴しを、主のしりてその身追やられぬ。夫より身をうき草の根をたえ、難波にさまよひ、長崎におもむき、後はあづまのかたにゆき、からうじて年月を送りける。浅間いとまとりて、老たる親も養ひてんとさそふ水もありしかども、父が心に得ざりければ、おもひとどまり、手弱女のひとりも過しがたければ、其思ひける様は、かの伊兵衛は誠にかりの契ながら、我ゆゑに世にたよりなき身とはなれり。事とひてみると、人していひおこせたりければ、これも其志すてがたくや思ひけん、はるゞと下り、長き妹脊となりにけり。世の中の幸不幸過不過は、誠に人力の及ぶ処にあらず。浅間が松の操をすてたるは父の爲なり。時めくかたになびかざるは、父の爲に操を顕したるなり。かりそめの枕に、伊兵衛に信を立しは、遊妓の貞といふべし。遊妓の貞といふうちに、己純孝の者なれば、我親にもよくつかへてんは、兼てしれりけるにこそと思ひやられぬ。今は名もかへて石といふよしなり。予が友溝部秀實、安永乙未国の事ありて、赤間に行て滞りしに、此女の孝状ききしかど、船いそぎければ、つぶさにとふ事なくて還りぬ。しかるに翌る申の暮、又国の事につき、赤間にとどまる事数旬、孝女の名おぼえはすれ、彼此と物色しける処に、浅間は北国屋の妻となり、猶八入といへる女あり、己が親のまづしければこのと頃、我食の半をわかちて是をやしなふよしなり。折柄浅間が旧里なる十兵衛といふ者にあふて、其まかなる事どもかたりていひけるは、親に孝なるものは他人にも厚し、我同郷のちなみなれ

ばかつて訪ひし事有しに、かたへに独打ふしたる男あり、いかなる人にやとへば、遠き所の人なり、此町某の家に手代つとめ居れり、然るに此頃恙にかかり、便るかたなきが哀におぼえ侍る程に宿しつる也と語れり。さらば久しく相しれるにやと、かへして問ければ、いなさにあらず、我つまひさしく漂泊し、身病はしき頃は、世に情ある人ありて慈愛うけ、とかくして今日のあるなりさりとて違国波濤の末言伝ふるほどの事だになし、人の上をこなたの事と思ひなせば、いとど哀に覚え、我夫いたわり給ひし方に、聊恩を謝する心に思ひ侍るなりといひしよし、物語て共にひちりこの中に蓮の花見つけたる心地しつ。秀實からん人には目のあたりあひてこそ、家産にもせめとて、やがて北国屋を訪ひけるに、皆むつまじげによりつどひて、父は目はさやかならねども猶健にみへまらうど来り給ふなど、親子して酒出しさかな清に取つくるひ、しばらく酒くみ、孝女の物語きけるに、親の己をいとふいとおしみて、心地少しにても例ならねば、神に祈り仏に頼み、賽のためる間もなきなどかたり笑ひ興じ、夫より引手ものどもとらせて、旅舎にかへりぬ。孝子とて世にも聞ゆるは稀なるに、猶彼家にはその人あるよし奇異なる様に思ひ、又八入が行状を人に問へば、幼より孤となり、人に養はれ、其父もむなしくなり、母とたのみしもの、己十三の年より病の床にふして、誰たのむべきものなき程に、主に願ひ、日ごとに隙こひ、湯水寝起の介抱し、もとより炊ぐべき糧とても貯へなき程に、主より己にあたる養をなかばわかち、十七のことしに至るまで養ひ侍るよしなり。秀實瓜田に履をいるると、人も咎めんな

れど、みずしてやまんも、本意なく、此者をよびて逢ける。このものことし十六色もこと木に劣りて見へける。酒など出したうべけれどもより糸竹のしらべもなく、只しめやかに物語どもしつ。秀實ここにはいかにして来たれるぞ、なれが身の上物語せよといひければ、八人袖かき納め、さる事に候、我は世にたぐひなき薄命なるものにて候つ、もと赤間町粟の屋何某と申者の子にて候ひしが、生れてふたつにして、父を失ひ侍り、其時我にひとりの兄侍り、母なるものも蟹の小船の楫をたへ、世渡る道のあらざれば、人のはからふにまかせ、兄をも人に遣し、わらはをば外浜町喜三郎といへるものに託し、其身はさるかたに嫁しぬ、それより喜三郎夫婦を父母とたのみ候、頼し親も家貧しく、五つといへるに、身をここにうられ夢現をもわきまへず、程なく十三といふに成ぬ、然るに此年父と頼し喜三郎あやまつて井に落入り、人の介抱にて引上たるをみれば、纔に息はありながら、身は只あけになりぬといひけるが、今の様にや思ひなされけん、たまりかねて泣出せり。暫ありて、心苦しき月日さへたてばたつものにて頼む力も今はなく、八十餘日ながらへて、終にはかなくなり侍りき、それさへあるに、又母と頼みし人も病起りて身かなはず、幼心のやるかたなく、人の賜はるものあれば、たすけにもなれかしとすれども、手に川水をせく心地しぬ、只主の情ありて、朝な夕なの事とひて、飯炊ぎ湯わかして、これを世にある人の抱きかかへとも思ひなしぬるも、ことし十六、今ほうかれ女の習ひ、身にもまかせがたく、かりのいとまもある時は、かへりとひいひ慰むることもあれども、又いとまなき時は、心

にこめておもふ許り、母は身のなやましきに他事なければ、今朝は遅かりし、きのふとはざりしなど、聞え侍るもきくに苦しく、ままならぬ身をうらみ候、せめて我かたちも人におとらず、他事なくおもはる方もありて、かかるうさの便とも頼むべき人にても有侍らば、おもひ慰むかたも候べきに、かたちだに人におとり、よしなき身を恨み候とて、さめぐくと泣ける。秀實かさねて実の母の行衛いかにと問ければ、されば其事にて候、是も今は身を人にまかせ候へば、かかる賤しき子もてるなど人にきこえなば、猶うき事のありもやせんと、深く我身をかくし候へば、風の音信さへ餘所に聞なし、恋しき時は、手を合せそなたと拜むばかりなりと、又さしうつむきて啼けるにぞ満座岩木にあらざれば、袖しぼらぬものもなかりけり。げにや先には諸共に親に捨られし子なり。孝思厚ければ、今ははや親の心にも杖とも柱ともいかに他事なくおもうらん。世に不是底の父母なしと、古賢のいひし言葉ども思ひ出て感じ侍りぬ。秀實もあまりに哀になりて、我も古郷には父母もてる身なり、かれが物語聞につけてもただつみふかく覚へ侍るなり、よしや身は河竹のうきふしに沈むとも、久堅の天津神地津神もみそなはし照し給ふべし、彌志撓まずば、などかくてくちはつべき、かならず志とぐる日あらん、心ぐるしくとも時のいたるを待べし、今暫はわれ隙得させん、とく歸りて心静に母の介抱せよとて、隙遣して別れぬ。秀實関より歸り、我を訪ひて、此事をかたりて哀ども催し、八入が行状国守の聞にも達し、素意とげよかしと、ともに祈り思ひけり。誠に世に教を立て、人に品流を分つ時は、儒中に異端を

いむ。業に俳優娼妓を退てよはひせずといへども其人の志行は、道の異類によつて異らず。業の拙きによりて拙からず。此故に天地よりして観る時は、君子のをり場に隔なし。其をる処の賤しければとて、其徳を仰がずんば天地の心にそむくべし親の命のそむきがたければ、心にそまざれども源賢の僧となり、浅間は遊妓たらざるを得ず。誠に女の道は、

さなきだに、おもきが上の、小衣ごろも、

我つまならぬ、つまなかさねそ、

と社守れども、不幸にして身を落しいるる処も、其身のとがにはあらず。かつて人に聞し事あり。京師の遊妓三五といへるが、「貞女両夫にまみえずといへども、我はたらちねのため、身を川竹のうきふしにけふのつまを待とて」と書て

たぞやたぞ、誰かはけふの、つまならむ、

定めなき世に、さだめなき身は、

と書捨しよし。其情尤憐むべし。明末南京の院妓林秋香といへるもの、人に嫁して後、むかしちぎりしもの、人していひ送りける事の有けるにこたへて、

昔日章台舞細腰

任君攀折嫩枝条

如今写入丹青裡

不_レ許春風再動揺。

これ光武のいはゆる、東隅に失して、桑榆に収むるにて、一旦節を失するも、貞潔の操立ことあり。これを花にみる時は、梅白く桃紅に、薔薇の色の紫も、己がいろくを春の風に綻ばすぞ、げに天地の心なるらん。これらの事思ひつゞけてかんがふるに、浄僧のふたたび遠流の命をめぐらし、浅間がいとまどくとりし、初が夜ふけて親のもとめかなへし、金左衛門が鴨を得し、事に軽重ありといへども、皆至誠のしからしむるなり。己怠るの心より、かかる事は及ばじとおもふ物から、かなふべきもとめだに得かなへずして過すなり。

二妓の事、秀實が探り得る所にして、便稀なるかたなれば、ふたたび人に徴する事もかたく、覚束なき筆の跡ながら、優なる心ばへを餘所に聞なさんも罪ふかく、きけるままにしるし侍る。近き程たよりあるかたの人は、よく其実を得て、かうがへ給ふべし。此餘は力の及びたづねとひ侍れば、おほかたはたがふ事あらじと、おもひ侍る。

豊前僧禪海

豊前中津川は、源豊後山中より出て、羅漢寺の下にそそぎ、衆流と相会し、終に中津の城をめぐり、海にそそげる大河なり。是にそふて一條の路あり。豊南に通へる往来にて、人馬ひまなくゆきかふ所なり。しかるにその間岩尾高くそびへ、激浪岩根にそそぎ、春雨五月雨などいとふ降り、または夕立の俄に川上に催せる頃は、人馬行なやみ、あやまつて、水

に溺るるもの年毎の事なり。しかるに享保の頃、江戸より回国の僧禪海といふもの来りこれを見て、誓て此岩をきり鬮き、後來溺没の難を救はんと願を起しける。されども碧嶂丹厓雲を吐納し、垂蘿長松うちしげり、空翠雨なきもつねに湿ひがちに、苔むし道滑なれば、世にその名さへ腐道といひならはして、中中此岩をうがたん事、愚公が山なり人みなあやしみ笑ひける。されども此僧氣を屈せず、経営やむことなし。其誠怠らざれば、次第に人感化し、吏民力を合する事ともなり、石工の償出来り、終に三十餘年の星霜を経、かの岩をきりうがつこと三所、すべての長さ百間、豎横二丈四方、洞中幽邃にして、太陽明通せざれば、処処岩に窓をうがち、これ仙宮にも通ふらんと思ふばかりなり。人馬幾ばくうちつどひても、何さはる事なき坦途とはなれり。げに念力砦を通すといへる諺を、むかしは耳にきく、今は目に見はべり。しかれば百の事廢するは、みな懈の心よりして、天地をも感動させ、目にみへぬ鬼神をも役するは、誠のやまざるよりなるべし。

梅園拾葉跋

青柳のいと長くして、ことたらざるぞあなる此に、すすむ大人の梅園拾葉をここに見よとあたへ給ふ。條條言葉数なくみじかくて、物よく其理をさとし給ふ。大人は足引の山のふところを立も出ず窓のもとにかしの実のひとりなり出て、誰を師としつかへず、遠くふるき世のさかしきから書に目を遊しめつつあるに、求めずして問よる人の多きは、ただ三史五経のかどかどしきのみとおもひをりしに、皇御国の古にもよくさとり給ふよ。春樹身さかりのむかしより、今六十年の老にいたるまで、遠き国に心やらずして、我生出し皇御国の礼ありしむかしのことのかたはしも知ることのあれかしとおもひをる心肝にこたへ、涙の出くることの多が餘り、そのしりへにほめ詞してしかいふ。

天明二つのとしむ月

小ののはる樹しるす

秋の嵐松よりつたへて、夜の雨芭蕉におとづるる燈の下に独坐して、人情世態思ひつづくるにしたがひ、藻塩艸のよしなし事どもを書集めて、かいやりなんもいかがとて暫巻となし侍りぬ。さらばこれを反故といわんもよかるべし。

寛延三年庚午九月既望

三浦安貞 撰

- 「梅園拾葉」（『梅園全集下巻』、名著刊行会、二〇一〇年十月五日、二刷）所収。
- 本文中空白の部分はその字数分だけ□で埋めた。
- 漢字は一部を除いて新字にした。
- PDF化には`LATEX 2ε`でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」。 <http://www.cam.ac.uk/hi-ho.ne.jp/munehiro/science/science11b.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>